
名無き世界と未知の世界(仮)

元号四年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名無き世界と未知の世界（仮）

【Nコード】

N9287S

【作者名】

元号四年

【あらすじ】

俺が編入した学校は、普通に魔法が使われるようなとんでもない学校だった。周りを見渡してもどこもかしこも魔法使いだらけ。一体何なんだこの学校は！？

なんだかいきなり変な女子に喧嘩売られるわ、最高に美人なのに作業服着てる担任とか、ユニークな人たちも勢ぞろい。

久しぶりに会った幼馴染（女）はめっちゃくちゃ可愛くなってるし、やっぱり気楽に話せる人って大切だよな。

もしよかったらでいいので感想とか評価とかつけてもらえたら幸

い
で
す。

1 - 1 (前書き)

初投稿ですので読みにくかったりする部分も当然あるかと思えます。ですが、そのあたりは寛大な心で受け流してくれると嬉しいです。

一応長編ということになっていて、予定ではラノベ十八巻分まであります。期待するかどうかは別として、これからいくつか投稿していくと思うので、よろしく願います。

追記

ただいま編集中です。しばらくおまちください。

「……なんだこの馬鹿でかい建物は」

荘厳な作りの校門をくぐって一番最初に目に入ったのは、イギリスのウエストミンスター寺院の設計者もビックリするサイズの建物だった。事前に貰った校内のパンフレットには第一校舎と書かれているが、とてもそうは思えない。むしろ……駄目だ。比較できるものが無い。

「星野くん」

校舎のでかさに呆気に取られていると、右の方から俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。そっちを振り向くと作業服を着た綺麗な女の人立っていて、学園の雰囲気と作業服の生み出す違和感に軽く眩暈がした。

だが、この程度で驚いてたらこれから先体が持たないだろう。とりあえずきちんと挨拶はしなければ。

「こんにちは。月詠先生……でしたよね？」

「はい。月詠暦です。これからは生徒と教師の関係なので、よろしくお願いしますね」

そう言って月詠先生は深々と頭を下げた。

俺の名前は星野龍馬^{ほしのりゅうま}。今日からここ、葉盟学院^{ようめいがくいん}に通うことになった高校二年生だ。

葉盟学院は幼少部から大学院まである、中等部以上は全寮制の学校で、総生徒数はなんと十万人を越えるマンモス校だ。当然その分土地も広く、日本のほぼ中心に位置する静岡県のあまり開発の進んでいない部分を国が買い取り、完全な育成機関を作ったというくらいらしい。作った理由の一つとして囁かれているのは、少子化を止める為に出会いの場を若いうちから多く作ってやろうというのも有力な説らしいが、国はそっちは否定している。

この学院は創設からまだ十年しか経っていないと聞いたが、そう考えると人数も規模も大きすぎると思うだろうが、実際はそうでもない。この学院は世界中で試験的に作られた学校と提携していて、世界中からいろんな人が集まってくる。実際、この学院にいる生徒の三分の一は外人だし、全寮制だから日本中から入校希望者が集まってくる。俺が知ってる県内の私立校でも、六百人は簡単に集まるんだからこの人数は大したことないのかもしれない。

この学院が建てられる前に建っていた学校や色々なものは、学校のほうは過疎化で廃校。その他も、国から出された多額の援助金のおかげで特に揉めることなく立ち退きは進み、学院を建てるのに必要な土地はほんの一ヶ月で用意できたらしい。この辺りは、この国の汚い部分が出た結果だと思うが、まあ、気にしないでおう。

「それじゃあ早速クラスのほうに行きましょうね。今は丁度ホームルームの時間なので、いい頃合いだと思います」

「あれ、月詠先生って担任なんですよね？ 今クラスってどうなってるんですか？」

「ノープロブレムです。全部副担任の松岡先生に任せてありますから」

普通副担任がこっちに来るんじゃないのか？ まあ、聞くのは野

暮だから別にいいけど。

「じゃあさっさと行きましようね。二年生の教室は七階から九階なんですけど、星野君のクラスは二十四組なので八階になります」

ほうほう。校舎が縦にも横にもでかいのはそういうことか。

「ところで、八階まではどうやって行くんですか？」

まさか階段を上がるわけではあるまい。

「普段はいろいろな方法があるんですけど、今日はエレベーターで行きましょう」

流石は国立。校舎内にエレベーターがある学校なんてここぐらいのものだろう。

ただ、一つ気になる。

(いろいろな方法ってなんなんだ……?)

俺には階段を上がるぐらいしか思いつかないんだが……。

エレベーターはかなりの大きさだった。普通のエレベーターは定員十二名、積載量は七五〇キロが相場だが、このエレベーターは定員一五〇名、積載量はなんと十トンというこちらもモンスターマシンだった。現代の工業はここまで進んでいたのか。

それはともかく、エレベーターを降りて一番最初に思ったのは、

廊下がとてつもなく長い。聞いた話だと横に教室が十六×二（教室が二列に並んでいて、東側の教室と西側の教室の間に廊下がある）、トイレが両端と真ん中に計六つ、エレベーターが校舎の真ん中を突っ切る形で縦に十六階まである。耐震は万全なんだろうか。

「星野くん、こっちです」

声のした方を見ると、月詠先生が大きく手を振っていた。目の前の教室の中にいる生徒は月詠先生が大声を出しているにもかかわらず、何事も無いように授業を続けている。どうやら防音が完璧らしい。

「ここが二十四組です。西側の教室なので間違えないようにしてくださいね」

月詠先生が丁寧に教えてくれているが、俺の頭は全然違う方向に向いていた。

「じゃあ少し待っててくださいね」

そう言って月詠先生は教室の中に入っていった。

「はいみなさん、ちゅうもーく」

それまで机の上のプリントに夢中になっていた生徒全員が顔を上げる。

「今日は、前から話していたように転校生が来ます！」

それまで静かだった教室が一気に騒がしく（完全防音なので声は

聞こえないが）なる。まあ、転校生（高校は編入生か？）が来たら普通そういう反応になるだろう。

「じゃあ早速呼んじやいましょう。星野くん、入ってきてください」

そう言って（聞こえないけど多分そんな感じのこと言ってるんだろう）俺にこっち来いとジェスチャーを送ってきた。

一つ深呼吸してドアに手をかける。だが、意外と緊張はしてなかった。

一気にドアを開けると、先程とは一転静かになった空気が俺を出迎えた。そんな空気は一切気にせず、教室の前方にある超巨大プラズマディスプレイの前まで歩いていく。

だが、毅然な態度で自己紹介をするというプランは簡単に崩れた。

理由その一、視線が痛い。

この学校は一クラスが百人もいる。当然今の俺はその百人の視線を受けているわけで、こんな状況で毅然とした態度なんてとれるはずがない。やっぱりというか、なんとというか。

「星野君、自己紹介してくれますか？」

「あ、はい」

そうだ、まずは自己紹介から入らなければ。俺はもう一度深呼吸をして前方を見据えた。

「星野龍馬です。よろしくお願いします」

頭を下げてから上げる。　ちょっと待った。なんだこの空気。まるで『もっと言うことあるだろ』みたいな感じじゃないか。

申し訳ないが言うことなんてない。というか、言えることが無い。趣味や特技なんてここで言ってもあまり意味はないだろうし。どうせ、俺は日曜大工が趣味です！　とか言っても、へえそうなんだという答えしか返ってこないだろう。ちなみに俺の趣味は日曜大工ではない。工作は得意だが、そこまで好きでもないし。

しかし、このままではマズイ。このままでは暗い奴、もしくはつまらない奴のレッテルを貼られてしまう。

「じゃあ星野君の席は　」

どうやら時間切れのようだ。月詠先生が自己紹介はもう終わったと思って俺が座る席を探し始めてしまった。

「　君、星野君！」

「は、はいっ？」

やっべ、声裏返っちゃったよ。なんか笑われてるし。

「あそこの席に座ってください。隣にこのクラスの委員長が座っているんで、分からないことがあったら彼女に聞いてくださいね」

月詠先生が指差したのは教室の中ほどにある席で、その席の隣にはきりつとした目つきの少女が座っていた。俺はその席まで歩いて行って、指定された席に座る。途中両脇の生徒（その他多数）の視

線を浴びせられたが、それもある意味気にはならなかった。

なぜなら、俺の隣の少女があまりにも可憐な美少女だったから。

艶やかな長い茶髪をそのまま下に垂らし、その先端にはいくつもの小さな鈴が付いている。切れ長な瞳はクールな印象を与えるが、纏っている雰囲気はとても落ち着いていてしかも柔らかなオーラまで放っている。肌は透き通るように白くて、同じ人間だとはとても思えないほどに美しい。一言で彼女のことを表すなら、地上に舞い降りた天使もしくは女神といった態で、俺の心は一瞬にして奪われてしまった。怪盗ルパンも真っ青である。

しかし、果たしてこれは現実なんだろうか。恐らく今の俺は相当間抜けな顔をしているか、有り得ないぐらい真剣な目つきをしているかのどっちかだろうが、どっちにしても目の前の美少女が現実世界に居ていいような存在ではないことは分かる。二次元から出てきましたって言う方がまだ信憑性はあるだろう。いや、世の中には小学生にしか見えない教師がいるらしいし、二次元から出てきたよな女の子がいても不思議じゃないのか？

「あの……」

「は、はいっ？」

うおおまた声裏返っちゃった。周囲の生徒の視線が痛いぜ。

「席、座ったらどう？」

「あ、ああそうだね！ このままじゃいつまでもホームルームが再開できないだろうし」

言いながら席に素早く着席する。周囲の生徒からやっぱり奇異の

目を向けられたがそれについては気にしない。これだけ生徒がいれば変わった奴の一人や二人いるだろうし。

もう一度視線を委員長のほうに向けると、委員長はにっこりと微笑んで、

「分からないことがあったら何でも聞いてね。なんて言っても、私はこのクラスの委員長なんだから」

「ああ。そんじゃ、これからよろしく。えっと……」

「私の名前は、鬼灯灯。鬼灯って知ってる？」

「ああ。夏に黄白色の花が開いて、初秋に袋状の萼に包まれた球形の果実を結ぶナス科の多年草だろ？」

「へー、物知りなんだね。その鬼灯に、街灯の灯で灯って書くんだ」

「同じ漢字が二つ続くのか。珍しい名前だな」

「うん。よく言われる」

「そんじゃよろしくな、委員長」

「うん！」

「はい、それじゃあ話を進めますよ」

そう言いながら月詠先生が手を叩きながら近寄ってくる。

「それじゃあ星野君、これが一週間の予定表になります」

そう言って月詠先生が一枚のプリントを取り出して俺の目の前に差し出す。えっと、今は四時間目のはずだから、四時間目はホームルーム、五時間目は数学、六時間目は魔法……魔法？

「月詠先生、ちょっといいですか？」

「はい。なんですか？」

「俺の目がおかしくなっただんじゃなければ、六時間目に魔法の授業があるように見えるんですが」

そう、これは絶対印刷ミスだ。この二十一世紀の世の中で魔法なんてものがあるはずが無い。あつてたまるか。きつと立法とかその辺りが間違つて印刷されたんだろう。

「はい。この学院では必修科目として一週間に十回魔法の授業があります」

うん。これは俺の耳がおかしくなっただ。この二十一世紀の以下略。この予定表に書かれている月曜から木曜までの六時間目が魔法つて書かれているのも、金曜日が魔法の演習つて書かれているのも全部印刷ミスなんだ。つて多すぎだろ。

「先生、この学校つてもしかして……」

「はい。星野君のお察しの通り、この学院は魔法使いを養成するための学校なのです」

パンフレットに書かれているはずなんですけど　　という月詠先生の声は全く頭の中に入ってこなかった。

魔法……。この二十一世紀に魔法……。はは。なるほどね。

「ドッキリか……!!」

なるほど。この学院の生徒はなかなかユーモアのセンスがあるようだ。教師までグルになってやるとは随分と手の込んだことをしてくれる。しかも見た感じじゃこのクラスの全員がドッキリに加担しているに見える。ならば俺は完璧なまでの道化を演じてやろう!

幸い今の俺の眩きは聞こえなかったようで、月詠先生はキョトンとした目をしている。

「そう言えばそうでしたね。ちょっと流し読みしただけだったんで一番大切なところを度忘れしてましたよ」

「そうでしたか。魔法の授業は場合によっては怪我人や死者を出すこともあるので、あまり事故を起こさないように気をつけてくださいね」

ほう、なかなか徹底しているな。先生の嘘まで堂に入ったものだ。

「それじゃあ進路調査票を回収しますので、一番後ろの席の生徒は列の全員分を回収してきてください。星野君には後でプリントを渡しますので、明日までに書いてきてくださいね」

そのままチャイムが鳴って四時間目が終わった。

さて、これからどうするべきなんだろうか。既にドッキリだということには気付いたが、俺はいつまで騙されていればいいんだ？ 幸い、六時間目に魔法の授業があるからその時になにかしらのオチで終わるんだろうが、それまで騙されているフリを続けなさいといけないのは正直つらい。どうしたもんか。

しかし今はそれ以上につらいことがある。俺は編入生という立場だから、当然のように俺のことを一目見ようと他のクラスから大量の生徒が集まっていた。中には積極的なアプローチを仕掛けてくる女子もいて、昼休みの半分をそれらの生徒をあしらうのに使ってしまった。

しかし、編入生っていうのはそんなに珍しいものなのか？ まるで初めて東京にやってきたパンダのような扱いだ。今なら動物園にいる動物たちの気持ち分かる気がする。

「ちよつと貴方、今よろしいかしら？」

「あ？」

頭の上から声をかけられて顔をあげると、金髪の綺麗な女子が腕組みをして仁王立ちしていた。やっぱり欧米の方のようで、瞳は薄く青のかかった碧眼で、肌はこれまた透き通るように真っ白だった。さらに、制服のデザインが他の生徒と少し違う。いわゆる金持ちがよくやるオーダーメイドというやつらしく、その女子がなにかしらの貴族もしくは金持ちの娘だというのが見て取れた。制服の胸のあたりにある校章の下にイギリスの国旗が刺繍されている。

「貴方、お名前は？」

「普通、人にも訊ねる時は自分からじゃないのか？」

質問を質問で返すと、その女子は嘆くように頭を振った。

「なんですのその態度は！ 私自ら話しかけているというのですから、貴方もそれに応じた態度でもって然るべきではありませんの！

「？」

「どうでもいいけど日本語上手いな。日本語って世界でもかなり難しい言語の一つだった気がするけど。」

「悪いけどさ、転校してきたばかりで君の事知らないんだ。君がどれだけ偉いのか知らないけどさ、やっぱり憤りってというのは必要だと思うよ。」

「いくら今の世の中が実力主義社会だっていっても、礼儀作法は必要だと思うし。」

「だが、俺の憤りは必要だというのを変なふうに受け取ったのか、その女子（そろそろ名前を教えて欲しいんだが）は突然激昂し始めた。」

「誰が遠慮も知らない喧しい女ですって!?!」

「は？ いや、別にそうは言っただけ。」

「上等ですわ！ 無知な貴方の為にこのわたくしが世の理を教える差上げますわ！」

「いや、別に頼んでないんだけど……」

「なんか勝手に意気込んでいる女子を尻目に周りを見ると、ある女子のグループが目に入った。その女子たちは俺と目の前の女子について何かを話しているらしいが、ここからだとはよく聞こえない。」

（もう少し……空間を繋げば聞こえるか）

「俺は自分の耳の中と彼女たちの近くに異空間　俺は空間転移と呼んでいるが　を発生させ、その異空間を通して彼女たちの話を聞くことにした。」

「あーあ、星野君もついてないね。転校初日からエルザに目付けられるなんて」

「あの子自分の才能を高く評価してるから余計質が悪いのよね」

「で、でも、星野君も悪かったと思うよ。エルザにあんなこと言っちゃってるんだから」

「どうやら俺は想像以上に厄介な奴に絡まれたらしい。」

「ちょっと貴方！ 聞いてますの!?!」

「聞いてないけど、何か？」

面倒だから手っ取り早く済ませてお帰り願おう。まだ昼飯も食ってないんだ。

俺が馬鹿正直に言ったからか、目の前の金髪は怒りが一周して逆に冷静になったようだ。まるで痛む頭を押さえるように眉間を指でつまんでいる。

「有り得ませんわ……どうして日本の男というのはこうまでも馬鹿なのかしら……」

その一言にカチンときた。

「どうしてイギリスの女つてのはこんなに無作法者なんだろうな？」
言ってから思ったが、俺はこの場にいるイギリス人の女子全員を敵に回したんじゃないだろうか。

周囲の視線は　マズイ。なんかイギリス人らしき人たちの周囲に殺気が渦巻いている。

「貴方！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「そっちだって日本のこと侮辱しただろ」

ここまで来たら後には引けない。これから俺はろくでなしのレツテルを貼られていくんだろうが、俺の愛する日本のことを侮辱されて黙ってられる程俺は大人ではない。

「大体、文化としても技術としても後進的な国で暮らさなければいけないということ自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛なのですわ！　このような学校が他に無いから仕方なくここに来たのであって、わたくしは　」

「だったら国へ帰ったらどうなんだよ？　それに、文化としても技術としてもって言ったな？　言うておくけど技術的にはイギリスなんて日本の足元にも及ばないぞ。それに、イギリスの文化なんて戦争ものばっかじゃねえか。日本の歴史と情緒溢れる文化を馬鹿にする資格なんてお前らブリティッシュには存在しねえんだよ！」

「な……言うに事欠いてわたくしたちをブリティッシュ呼ばわり……。もう許せませんわ！　貴方はわたくしが正当な手段を持って肅

清しますわ!」

ああ……なんか話がややこしい方向に……。いや、そう仕向けたのは俺か。って言うか、そもそもブリティッシュユって罵倒語なのか？

「決闘ですわ!」

……決闘？

「まさか、俺と喧嘩しようってのか？」

「ええ。まあ、喧嘩といってもわたくしがあなたを一方的に痛めつけるだけですけれど。この学年四位のエルザFFダイヤモンドが!」

……。

……まさか俺と喧嘩しようって言う女子がいるなんて……世界は広いつて事か……。

「ふう……」

彼女には悪いが、俺は喧嘩なんてする気は無い。負けるのが怖いからとかそういう理由ではなく、俺が彼女と喧嘩しても勝負にならないのは目に見えてるからだ。大の男に喧嘩を売るんだから護身術か格闘技の心得はあるんだろうが、そんなもので俺とやりあうのは自殺にも等しい行為だ。

というか、彼女は俺のことを知らないんだろうか。俺ってその筋では結構有名人のはずなんだけど。

「ハンデが欲しければ付けてあげないことも無いですわよ？ もっとも、ハンデがあつたとしてもわたくしの勝利は揺るぎませんが」

ほほう、随分な自信だな。

「逆に聞くけど君の方がハンデは必要なんじゃないの？ はっきり言つて君が俺に勝つ確率は1%もないけど」

「確かに、普通の勝負ならわたくしは貴方に勝てないでしょうね」
「なんだ、分かつてて言つてたのか？ それはそれで問題があるよ
うな。」

「でも、貴方は勘違いしていますわ」

「は？」

「確かに普通の勝負ならわたくしが貴方に勝つ可能性は限りなくゼロでしょう。しかし、この学院は知っての通り魔法学校なのですわそれがどういふことかお解かりかしら？」

また魔法か。そろそろそのくだりにも飽きたぞ。

「つまり、ただの編入生である貴方はこのわたくしには絶対に勝てないといふことすわ！」

そう言つて彼女 エルザは制服のポケットから一枚のカードを取り出した。一見するとトランプのカードのようだが、カードには何か杖のようなものが描かれている。

「貴方には抵抗する隙も与えせんわ！ 来たれ！」

突然どこかの国の言葉を叫んだかと思うと、カードが白く発光しその形を杖へと変え ってちよつと待て。物質の分解と再構築？ しかも素粒子に分解してつて、俺が今試行段階の最新技術じゃねえか。まさか既に完成してたつて言つのか。シヨックだ。

エルザの手元に出てきた杖は、先端部分に華美な装飾が施された、いわゆるロッドというものだった。

「速攻で決めますわ！ グラン・フェリア！」

エルザの掛け声と共に俺の周囲に突如炎が発生する。だが、そんなもので俺の心は揺らぎはしない。どうせ高性能なホログラムみたいなものだろう。その証拠に触つても熱くなんか

「つて熱っ!？」

これまさか本物なのか？ 確かに肌を焼くような熱は本物だが。

そんなことを考えていると、それまで俺の周囲で燃えていただけの炎が突然明らかな攻撃の意思を持つて襲い掛かつてきた。辛うじて炎の無い方へ飛んで避けるが、それまで俺がいた部分は熱によつて溶解していた。

「.....」

どうやら考えを改めないといけないうだ。この世界に魔法なんてものがあるなんて今だに信じられないが、そんな事を言つてる場合でもないらしい。

(少しぐらい本気出してもいいよな)

普通の女子に手を上げるなんてあまり感心できる行為じゃないが、このままだと俺が焼き殺される。俺は覚悟を決めることにした。

襲い掛かってくる炎を躲し続け、踏み込むタイミングを模索する。その結果、炎には一定の法則によって動かされていることが分かった。

(タイミングは一瞬。どうやらあのロッドを奪えば炎は消えるみたいだな)

見ていて分かった法則は一つだが、俺にとっては一つだけで十分だ。その法則は、炎は四回のホーミング後自動でエルザの元へ戻る。「このっ、ちょこまかと」炎の動きをしっかりと見極め、四回目のホーミング後に踏み込むために少しずつ距離を縮めることにした。

(まずは一発)

顔の数センチ横を通過していく炎を尻目にその炎とは反対方向に飛ぶ。一回目のホーミングが発動し、俺の背後から炎が襲い来るが、それをしゃがんで躲すと後の二回も同じように躲す。そして四回目のホーミング。炎は俺の真上から降り注ぐようにして落ちてくるが、そのタイミングを逃さずに一気にエルザの元に詰め寄った。

「!?!」

エルザが慌ててロッドを自分の前に突き出す、俺の狙いはそれだ。

呼吸を合わせて一瞬でエルザの手元からロッドを引き抜き、近くにあった棒とすりかえる。剣道の秘技、『無刀取り』だ。

「へえ、ルビーか。結構なもの使ってるんだな」

「えっ？」

手元のロッドが別のものにすりかえられたのに気付いたエルザが頓狂な声を出す。しかしそれも当然だ。無刀取りは剣道をかじった程度で出来る技ではなく、しかも取られたことにも気付くことは無いかから剣道では奥義の一つとなっている。そして、エルザからロッドを奪ったことで背後で燃え盛っていた炎が制御を失い、霧のよう

に散った。

「今……何が起きたんですの……?」

ただの棒を構えたエルザが困惑の表情を浮かべる。

「だから言っただろ? ハンデは無くてもいいのか、って」

俺は中学を卒業するまでの間に剣道の八段、空手の五段、柔道の七段、合気道の九段を取得している。前の学校では風紀委員に入っていて、校則を乱しまくる奴らと熾烈な戦いを繰り広げていたから相手を傷つけずに無力化する方法もいくつも知っている。そういう意味でハンデは必要なのかと聞いたんだが、彼女は自分の力を過信してしまったようだ。結果として武器のロッドは俺に取られ、全く使い物にならない棒をつかまされている。

「ふ……ふ……ふ……ふ……ふ……ふ……」

「? 何がおかしいんだ?」

突然エルザが笑みを漏らした。その笑いは自嘲のものではなく、まるで俺の愚かさを笑っているかのように背筋に冷たいものが流れる。

「まさかその程度、というわけではありませんよね?」

「どついう、ことだ?」

俺の声は自然と震えていた。そして、それを彼女に悟られないようにするので必死だった。

「それは」

「その二人! そこを動くな!」

エルザの声は突然の乱入者の怒声によって遮られた。目だけをそちらに動かすと、そこには手錠を持った女の人が仁王立ちしていて、凍えるような冷たい視線が俺とエルザを射抜いていた。

「許可の無い魔法戦闘は校則違反だ。エルザ、お前を懲罰房へと連行する」

「仕方ありませんわね。 貴方」

「な、なんだ」

エルザは口元を歪めて俺に向かって微笑んだ。その笑顔はとても

魅力的なはずなのに、体中に鳥肌が立った。

「運が良かったですわね。あのままだったら、貴方をこの世から抹消することが出来ましたのに」

そのままエルザは乱入してきた女性にどこかに連れて行かれた。

しかし、あの時に感じた感覚はなんだったんだろうか。ロッドは奪ったし、彼女に何かが出来たはずがないのに。そう思って手元に視線を落として、ようやく彼女の言葉の真意が分かった。

手元からエルザのロッドが消えていた。だが、確かに抜かれた感触は無かった。

（まさか彼女も無刀取りを……？）

いや、そんなはずはない。無刀取りは剣道の秘技中の秘技で、一見ただけで使えるようなものじゃない。

（これは……俺の予想を上方修正しないとイケないな）

正直魔法なんてものは未だに信じられないが、俺の力も信じられないようなものだしお互い様だろう。俺は何事も無かったかのように自分の席に戻り、次の授業の準備を始めた。

魔力の胎動

昨日の願いも虚しく、朝っぱらからトラブルが発生した。

場所は第一校舎八階、二年二十四組の教室。

時刻は朝の七時五十七分。始業のチャイムまであと三十三分。

その時間に、俺は教室へと到着した。

俺の席は教室の真ん中（廊下寄り）。一緒に教室に来た大和の席は窓際最後尾。ちよつと羨ましくも思った。

教室にいる生徒の視線はとある一点に向かっている。そのとある一点が俺の席なのだ。

だが、それだけなら注目を集める必要は無い。問題はその上に乗っかっているもの。

（去年のバレンタイン以来だな……）

いや、既に机の上には飽き足らず、席の周囲に散乱しているもの。手紙に便箋、巻物に粗品、果てには矢文まで刺さっている。世間一般で言うラブレターという物だった。

自慢ではないが（自慢したくも無いが）、俺は世間一般で言うところのイケメンだ。産まれてこのかた一度も染めたことの無い真っ黒な髪を短髪に切り揃え、ワックスで無造作に立たせている。身長は前述の通り百九十二センチあり、無駄なく付いた筋肉はシャープで、それでいて力強い。アクセサリの類はあまり付けないようにしているため、もとの素材が立つようにしてある。

中身は自分でも分かるほどのろくでなしだが、外面だけは良いから何も知らない奴からはかなり人気がある。　　って、自分で言うてて悲しくなってきた……。

ともかく、俺は何故か行く先々でこういう目に遭うのだ。別に意図してやってるわけでも、望んでるわけでもない。

とりあえず席に溢れた手紙を、空間転移で別次元に捨てる。一々読んでる暇なんてないし、今はそれよりも大きな問題がある。

俺の席　机の上に乗った異質なもの。それも、去年のバルンティン以来見なかったものだった。

「これは……すごいな……」

恐らく等身大の、何がしたいのか分からない、そんな感じのチョコのオブジェだった。

なぜか、俺の顔や髪型まで精巧に作ってある。よく見ると手のひらや顔に指紋に手相や皺、ピーー（自主規制）まで精巧に作られている。何がしたいんだろうか、これの送り主は。法的手段に訴えるぞ。

俺は手紙と同じようにオブジェを別次元に叩き込む。気分的には Dank シュートをアリウープで決める感じで。

とりあえずゴミの処分は完了。今日の朝も滞りなく問題が解決

「　して、なかったか……」

机の中に一通の手紙が。しかも、今までのラブレターとは違い、口が蠟ろうで閉じられている。間違いなく、上からの命令書だ。

封を破ると、中には一枚の羊皮紙が入っていた。

だが、そこには何も書かれていない。それもそのはず。その羊皮紙は法術を使う際に使う法力を流し込まなければ文字が出ないように、特殊な細工を施しているからだだった。

『現状ヲ報告セヨ』

羊皮紙に法力を流し込むと、それだけが浮かび上がった。手紙としては相当に使えないものだと思うが、どういう理屈か自分の頭で何かを考えると、その思考パターンを羊皮紙が勝手に解析して、それを術者のもとに送る仕組みらしい。

俺は頭の中に返答を思い浮かべると、すぐに別の文字が浮かび上がった。

『指令。調査ヲ続行セヨ。何力不都合ガアレバ報告スルコト』

それだけ読むと、羊皮紙がボロボロと崩れ、空気に溶けるようにして消えた。

まだまだやりたいことはあるんだ。虚偽の報告をしちゃったけど、

まあ、いいか。

昼休み、学食

「で、どうよ？」

「どうつて？」

俺は昼休み、学食のシステムについて説明しに来た仁と一緒に飯を食っていた。

基本的な部分はどこも殆ど変わらない。券売機で自分の食べたいものの食券を買い、それをカウンターに出して料理を受け取り、食べる。

俺が頼んだのは学食で七番組ぐらいに人気のある日替わり定食（日替わりなのになぜか人気）で、今日のメニューはごはんと卵スープ、野菜炒めと漬物という、いろいろなジャンルのものが混じったメニューだ。

ちなみに、仁が頼んだのは学食で四、五人ぐらいしか手を出さないとと言われる超大盛りの「メガ盛り丼」。俺が食っている日替わり定食の二十倍近い量を持つ、カロリー量はおよそ五万二千キロカロリーという化け物だ。

中に入っている具材は、たまねぎと卵、肉という親子丼というのが正しいものだが、その量が凄まじい。見ている限り、仁の体の半分は埋まるんじゃないかと思えるほどだ。

「この学院の奴ら、かなり規格外だろ？ お前も混乱してんじゃねえか？」

「ああ……確かに……」

この学院の人間には、いわゆるビツクリ人間が多すぎる。どういふことかと言うと、一回の跳躍で十メートル以上跳ぶ奴や、走るのが恐ろしいほど速い奴。仁みたいに有り得ないぐらいに食う奴や、その国では絶対的な権力を持つ貴族の娘とか、エルザみたいな考えが全く理解でき

ない電波人間が大量にいる。さすがに魔法云々は慣れたが、宇宙と交信する女とか大地の声を聞くババア（地理の先生）とか、機械の繋ぎ目に性的興奮を覚える奴など、変人や奇人が有り得ないくらいいる。

「この学院で普通の奴を探す方が大変だからな。愛華は至って普通だけど、俺は普通じゃないって自覚してるし、大和も家柄が普通じゃないからな」

「そうだな。俺も自分が普通の人間じゃないって自覚してるし」

普通の人間は空間転移なんていう能力は使えないだろうし。そう考えると、俺ってこの学院で一番イレギュラーな存在なのかもしれない。

「でもさ、俺の持論だと人には普通というものは存在しないんだよ」
例えば、見た感じは突出したものも欠けたものもない、平凡な人がいたとする。その人の血液型がA B型だと分かった時点で、人はその人の事を「ああ、変わった人なんだろうな」と思う。

一番分らないのは普通の定義だ。何をもって普通とするのか、具体的な取り決めは何も無い。特別誰かに好かれるわけでも、誰かに嫌われるわけでもない人のことを普通と言うのか、誰にでも好かれ、誰にでも嫌われるような人のことを普通と言うのか、具体的なことは何も決まっていけないのだ。

と、なんだか哲学的なことを考えてしまった気がする。駄目だなこれじゃ。こんなんじゃいつまでもジジくさいって言われてしまう。「まあそれはさておき、どうなんだ？」

「今度は何だよ？」

「惚けんな。愛華のことだよ」

ああ、ついにそこに来たか。

小学生の頃からそうだったが、愛華は俺のことが好きだ。これは自惚れとかじゃなく事実で、俺も愛華のことは嫌いじゃない。

じゃあ好きなのかと言われると、首を傾いでしまう。愛華は可愛いし、好きにならないほうがおかしいと思うんだけど、なんだか

ピンとこない。どっちかって言うと、俺はエルザみたいな外人の方が好みだ。しかも一番の問題は、俺の趣味が可愛い系ではなく綺麗系だからだ。愛華は分類的には可愛い方であることが俺の心にピンとこない理由の一つであることは間違い無いんだろう。

で、一番困るのは仁が愛華のことを好きだって言う点だ。幼馴染で三角関係。かなり笑えない図式だ。

「別に……嫌いでは無いと思う」

「じゃあ好きなのか？」

「それもなんか違う気がするんだよな……」

愛華に対する気持ちをあえて言葉にするんだったら……、

「仲の良い女友達ってとこかな？」

「それ本人が聞いたら滅茶苦茶悲しむぞ」

「そんなの百も承知だ。……って、あれ？」

「人の恋路にあれこれ口出すわけじゃないけどさ、もう少し向こうの気持ちも考えてあげた方が良いと思うぞ」

「……大和。いつの間に……」

仁と話すのに夢中で隣の席に大和がいることに気付かなかった。

「特に、姫城の場合は片思いが十三年ぐらいだっけって聞いたぞ。それだけの間一人のことを想い続けるって言うのはかなり大変なことだ。俺も経験があるから分かる」

「分かってはいるんだけどさ……なんか言い出し辛くてな……」

そもそも、何て言えば良いんだ。自分のことを十三年も想ってる奴に、「俺がお前を好きになることはない。諦めてくれ」とでも言うつもりか？

「別にそこまで言う必要は無い。ただ、この場合はお前と姫城の位置関係が問題になってくるからな。前聞いたときには、姫城はお前のためなら何でも出来るって言うってたぞ？ でも、お前は姫城のことを仲の良い友達程度にしか思っていないんだろ？ 想いは確実にすれ違う。好きになれないんだっけたら早めに諦めさせるのも一つの手だとは思うけど、このままを貫くにせよ、きちんと話すにせよ、確

実に今の関係は崩れるぞ」

「じゃあどうしたらいいんだ。俺は幼馴染っていう関係は心地良いものだと思ってるし、ある程度世話も焼いてくれるから便利だと

「ああ、そういうことか……」

「なんか自分の気持ちの奥底にある感情が分かった。俺が幼馴染っていうものを大事にしたいのは居心地が良いからじゃない。

「何がそういうことなんだ？」

「仁が訝しむように聞いてくる。だが、これを素直に口に出せば間違いない愛華だけではなく仁との関係も崩れる。」

「まあ、仁とはもともと敵対関係だったから今更どうってわけでもないけど。」

「なるほどな……」

「全てを悟ったように大和が言葉を漏らす。いつも思うけど、大和は読心術の類が使えるんじゃないだろうか。そうじゃないと、普段から妙に察しが良いことの説明が付かない。俺の考えが駄々漏れになっっている可能性も否定できないけど。」

「そろそろ昼休みも終わりだな。俺は教室に戻るわ」

「そう言っただけで大和はトレーを片手にさっさと歩いていってしまった。俺も早く食わねえと」

「仁のメガ盛り丼はいつの間にか十分の一近くまで減っていた。その小さな体のどこにそんなに入るのだろうか。今度解剖してみたい。お前、今何か変なこと考えなかったか？」

「よく食うなって思ったただけだ。他意はない」

「本当にそう思ったただけだ。うん、ウソはついてない。まあいいや。愛華の件はそのうちじっくりと聞かせてもらうからな」

「仁は残ったご飯を口の中に掻きこむと、メガ盛り丼が入っていた巨大などんぶりを抱えてさっさと食堂から出て行った。」

「……冷て」

「日替わり定食の卵スープは、すでに冷め切っていた。」

「それでは、今日の魔法の授業は五十二組と合同で行います」
六時間目になって第八アリーナへ行くと、二十四組と五十二組の
面子が揃っていた。

まあ、それはいい。この学院で合同授業なんて稀に見る光景でも
何でもない。事実、今日の授業は五時間のうち四時間が合同授業だ
った。

まあ、それもいい。今一番問題なのは、この五十二組に在籍して
いる一人の女子だ。

輝く金髪を風になびかせ、優雅に微笑むその女は

「ふふっ。わたくしと共に授業が受けられることを光栄に思うが良
いですわ」

『イエス、ユア、ハインス！』

馬鹿ばかりだ。

あの馬鹿集団の先頭にいるのが、昨日一日で俺の中の評価がドラ
ンクになった（ちなみに、俺の中での評価はSからEまでの六段階
が存在する）学年四位の女。学院で知らない人はいないと言われる、
ある意味有名人。

エルザⅡFⅡダイヤモンド。二度と会いたくはなかったのだが…
…。

「ふむ……」

なるほど。全て分かった。

「あら、相変わらず貧相な顔をした愚民がこちらを見えていますわ」
誰だそいつは。……って、すでにエルザの方を見ている奴が俺し
かいねえ。

ってか、相変わらず貧相な顔って、これでも一応イケメンとして
通ってたぞ。

「今日の授業内容はいつも通り、魔法スキルの上昇です。張り切っ

「やってください」

二十四組の中からは『はい』という声上がる。こつちも馬鹿ばかりだ。

さて、俺はどうするか。魔法の使い方は今日の朝、大和に教えてもらったから出来ると思うけど、今まで使ってきたのが法術だからそつちの方が適用される可能性は高い。

俺の法術、『空間制御』リム・クリッパーは文字通り空間を操る能力だ。空気中の気体の濃度を変化させたり、特定の場所における重力や引力、磁力などを変動させることが出来る。

応用すれば自分の体に強力な斥力や反発力を発生させて、自分の体に攻撃が全く当たらないようにすることも出来るし、俺が普段からよく使う『空間転移』も空間制御から生まれた応用技の一つだ。

法術の起源は十四世紀のヨーロッパ。誰が使い出したのかは分かってはいないが、昨今の『錬金術』の礎となったものだ。法術は基本的に誰でも使えるものだが、誰もが使えない。いや、誰もが使おうとしない。法術を使う際に大事なものは、「自分の気持ちに素直になる」こと。心から素直な人間なんてそうはいない。必ず頭のどこかで抑止力がかかるものなのだ。だから、自分に素直になれない人間は法術なんて使えないし、そもそも法術を知っている人が数少ないから使おうとする人もいない。そういうこと。

ちなみに、法術を使う人にはA B型が多いらしい。

「とりあえずやってみるか……」

俺はいつも通り法術を使うときの要領で、自分の周りに黒い重力球を発生させる。うん、魔力の感じがどうも掴みにくいけど、これならまあ大丈夫か。

「グラビティ・コア」

直訳すると「重力の核」ってところだ。俺が空間転移の次によく使うものだが、これはこれでかなり威力が高い。この重力球の周りには地球に働いている引力の数百倍の力が掛かっているし、内部では地球上の数億倍の重力が渦を巻くようにして球を形成している。

これに触れた物質は原子のサイズまで押し潰され、跡形も無く消える。

力を拡散させて重力球を消すと、いつの間にか俺の周りに人が集まっているのに気付いた。……な、なんだ……？

耳を澄ますと、近くの女子の話し声が耳に入ってきた。

「あれって重力魔法だよね……？」

「この学院じゃ一人も使えないはずなのに……」

「やっぱり星野君って凄い！ イケメンだし、スポーツ万能だし、魔法まで出来るなんて言うことなしじゃん！」

うん。少し照れた。

ちなみに、スポーツ万能っていうのは今日の三時間目。体育の授業でバスケットをやった際に、一ゲーム十分の試合で三十八点を一人で決めたからだ。ダンクからスリーポイントまでなんでもやったから、さすがにみんな驚いてたけど。

「……………」
そんな中、ムツとしている女子が一人。自分以外の人間が注目されるのを極端に嫌う、エルザがこっちのほうを睨んでいた。

「……なんだよ？」

「なんだよ、じゃありませんわ！」

突然意味不明なことを喚きだしたぞこのお嬢様は。頼むから分かりやすいように説明してくれ。出来ればこれを読むであろう小学生でも分かるレベルで。

「何も出来ないであろう貴方を嘲笑しに来てみれば、何を何事も無いかのように魔法を使っているんですの！？」

「……………は？」

どうしよう。まったくもって意味不明だ。要するに、俺は編入生だから魔法なんて使えないと思った。無様な姿を晒す俺を笑いにきた。現実には、俺は学院で誰も使えない重力魔法（法術だけど）を使っている。予想外。逆切れ。

なるほど。自分で考えた方が分かりやすい。

エルザは地団駄を踏むような顔つきでこっちを睨み続ける。視線に攻撃力があつたら俺の体は蜂の巣だろう。そういう魔法もありそうだけど。

「もう我慢できませんわ！ 昨日は途中で邪魔が入りましたけれど、魔法の授業中は戦闘行為も黙認されますわ」

「……だから？」

その後が続く言葉が百パー理解できるのが恐ろしい。しかも、確実に良い方向に向かわないって言うのがこれまた恐ろしい。

エルザは細くしなやかな指を俺に突き付け、

「わたくし、エルザ「F」ディアマンテは貴方に勝負を申し込みますわ！」

「お断りだ」

なっ、と言つてエルザの表情が固まる。

だつて、自分から面倒ごとに巻き込まれるなんて御免だもんよ。

時間の無駄。

「何故ですの!？」

「面倒だから」

率直かつ素直な意見。回りくどいのは嫌いなんだ。

「……っ!」

あーあ、面倒なことになりそうだ。このお嬢様、相当沸点が低いのか蒸気が噴き出す数秒前のやかんみたいになっている。真空下の水かよ。

「大体なんで俺に付きまとうんだよ。『本当は彼の事が好きだけど、私のイメージ的に素直に感情表現は出来ないからわざと作ったウザキャラで気を引こう』って作戦なのか？」

「なっ……」

世間一般ではそういうのを『ツンデレ』というらしいが、このお嬢様がそうである可能性はほぼゼロだろう。大体、普段意地っ張りな感じなのに特定のシーンだけデレるって意味が分からん。人間素直なほうが得するぞ。

「なつ、何を馬鹿なことを……！」

「とにかく、俺はお前と勝負する気なんてさらさらない。昨日の一件、あれがお前の本気なのかどうか知らないけど、あれが本気ならまず間違いなく俺には勝てないぞ」

俺は今のところ、奥の手を二十個ほど隠し持っている。海斗と本気で殺り合うんだつたら全部使わないといけない（全部使っても勝てない）けど、どう考えても近接戦闘向きじゃないエルザ相手じゃ奥の手を使う必要もない。

「随分と自信がありますのね……！」

「自信じゃなくて事実だ。なんなら、今ここで力の差ってやつを体に刻み込んでやってもいいんだぞ？」

「貴方にそれが出来るとでも？」

「言っておくけど、俺は人を殺すのに躊躇いなんて無いぞ。牙を向けた獣はその牙を折られ、惨めな死に様を晒す。イギリスの言い伝えにもあるだろ？」

訳あって俺は命についての考えが薄くなってる。その俺と命をかけた勝負をしようって言うなら、本気で死を覚悟してもらわないと「言ってくれるではありませんの……！」

「（ハア……）お前も退かないな。何がお前をそこまで駆り立てるんだ？」

こっちにとつては貴重な魔法の授業の残り時間がどんどん減っていく。いい加減このお嬢様に付き合ってる時間すらも惜しくなってきたんだけど。

「わたくしは祖国イギリスで選ばれた人間。言わばエリートなのですわ」

「へえ？」

だから？

「わたくしは誰にも負けることを許されないのですわ。祖国の代表として、そして、十九代続く貴族の娘として」

「その割には仁と大和、愛華にすら負けてるみたいだけど？」

「実際に戦ったことが無いからですわ！ 戦えば間違いなくわたくしが勝利します！」

「じゃあ今なんて丁度良いじゃんか。おーい、大和ー！」

遠くの方で精神統一をしていた大和を呼びつけると、すぐに近くまで走ってきた。

「どうした？」

「お前とエルザってどっちの方が強いんだ？」

一番気になってることを率直に聞いてみる。そんな俺の質問に対する大和の答えは、とても簡潔だった。

「どう考えても俺だろ」

「だろうね。」

だが、エルザはどうしても納得できないようで、俺と大和に言い掛かりを付けてきた。

「何を根拠に言ってるんですの！？ 対等な条件で勝負をしたなら間違いなくわたくしに凱歌が上がりますわ！」

「……………」

大和は無言で呉服の裾から扇子を出すと、目にも留まらぬ速度で開いた扇子をエルザの首元 頸動脈の辺りに押し当てた。

あまりの素早さに大和の周囲に風が巻き起こり、近くにいた俺はたたら踏鞴を踏む羽目になったが、それはどうでもいいのか。

「……………」

「お前は隙がありすぎるんだよ。だからいつまで経っても俺らには勝てない。こんな様で姫城はともかく、俺や仁、ましてや龍馬に勝とうだなんて百年早いんだよ。」

俺らは近接戦闘タイプだからな。当然、メイジを相手にするときの心得なんて百も承知だ。メイジは接近戦に持ち込まれたら勝ち目が無いってのをまだ理解してないのか？」

あまり言いたくないが、今の大和の動きを全く目で追えなかった。古武術でいう『無拍子』とかいうやつだった気がするけど、古武術は会得してないからよく知らない。

「まあ、あまり死に急ぐな。隙が無くなればお前に近づけるような奴なんてほとんどいないんだから、まずは心を落ち着けて、冷静に事を運べるようになれ。ぶっちゃけると、もう少し大人になれってことだ」

大和が扇子をエルザの首元から離し、慣れた手つきでそれを閉じると呉服の裾の中に戻した。

「龍馬、お前もあまり問題を起こすなよ。一々鎮めるのが面倒だ」

「ああ。毎度悪いな」

そう言つと、大和はもといた場所へと帰っていった。

「で、まだ何か用ある？」

「ふんっ！ 興が削がれましたわ！」

エルザは長いスカートを翻すと、後姿からもはつきりと分かるくらいに苛立ちを振りまきながら去っていった。何だっただんだ一体。

それとほぼ同時に、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。授業も終わりだ。なんかやたら早かった気がするな。

今

日の成果。重力魔法を覚えた。

「なんか最近やたらトラブルが起きる気がするな……」

「え？」

「ん？ 今俺何が言った？」

「『最近やたらトラブルが起きる気がするな……』って言ったよ」

「ああ……声に出てたか……」

放課後。俺と愛華は高等部の校舎から少し離れたところにある、学生が経営しているカフェへと来ていた。

この学院では、生徒の自主性や社会的なことを学ばせるために、申請すればどこでも勝手に商売を始めることが出来る。寮の近くで

は、園芸部が作った野菜を売る直売所もあるし、漫研や文芸部がつくった本などを売ってるところもある。中には、生徒が個人的に作ったとは思えないほどにクオリティの高い機械や、興味は無いがゲームも売っている。

学院の裏通り（どこにあるかは知らない）には、魔導書や杖、ロッドに剣などを売っているところもあるらしいが、俺には愛用の日本刀があるため今のところは必要ない。

「エルザさんのこと？」

「それもあるけど……愛華は俺のことどう思う？」

「ええっ!？」

「な、なんだよ急に大声上げて」

「えっと、その……それって、そういう意味？」

「は？」

「う、ううん！ なんでもない！」

「……………」

よく分からない奴だ。

「えっと……か……かっこいいと思うな……」

「うん、それは分かっている。俺が聞きたいのは、客観的に見て俺がどういう人間に見えるかって事」

「客観的に？ うーん……、少し取っ付き難い人？」

「なんで？」

「龍馬って顔はかっこいいし、聞いた話だとスポーツも勉強も出来るんでしょ？」

「まあそれなりに」

実際はかなりのレベルで出来るが、人間謙虚な姿勢が大切だって昔の偉い人が言ってたような気もするし、言ってなかったような気もする。

「お待たせしました。アイスコーヒーです」

「ああ、俺だ」

「ミルクとお砂糖は必要ですか？」

「いや、いらぬ」

「かしこまりました。それでは失礼します」

「コーヒ―はブラック。ミルクや砂糖を入れるなんて、そんな女々しいことが出来るか。」

「龍馬ってコーヒ―好きなの？」

「ああ。でも、部屋じゃ飲めそうに無いからな」

「そっか。龍鳳君っていつも緑茶だもんね」

他愛も無い話で笑いあう。こうというのが一番落ち着くよな。

「おっ、お待たせしましたっ……」

なんだか人をやたら不安に感じさせる声が聞こえてそつちを見ると、おぼんの上に乗せたパフェをカタカタ言わせながらプルプル震える女の子が立っていた。

なんだかとてつもなく嫌な予感がする。この後の予測をするなら、何かに足を引つ掛けて盛大に転ぶシーンが目に浮かぶ。

そして、それは現実になった。

「いっ、イチゴパフェのお客さ（ガッ）まっ!？」

テーブルの脚に自分の足を引つ掛け、見事なまでに俺の予想通りにすっころんだ女の子は、俺の方に向かって盛大にパフェをぶちまけた。

ように見えた。

俺は即座に立ち上がり、一瞬にして飛びかけたパフェを掴んでテーブルの上に置くと、おぼんを左手で掴み、その子を右腕で抱きとめた。

ほんの一瞬の出来事。その全てを目で追えた人はいないだろう。

「大丈夫？」

「はっ、はひっ」

よかった。怪我は無いみたいだ。

「お客様、大丈夫ですか？」

店の奥のほうから責任者と思しき人（多分高等部の三年生。ネクタイの色が違う）が慌てた様子で出てきた。

「はい。こっちは」

幸いパフェの盛り付けも崩れてないし、コーヒーのグラスも倒れていない。

「すみません。この子、まだここに入ったばかりで」

「すっ、すみませんっ！」

「いえ。こうなることは予想してましたから」

少し可哀想な言い方もしれないが、それはこの子自身も分かってるだろうから別に構わないだろう。

「それでは、失礼します」

「しっ、失礼しますっ！」

俺の態度から何かを読み取った店長が、恐縮しすぎで頭を何度も下げている女の子を連れてスタッフルームへと戻っていった。

「悪いな愛華。ほら、食べようぜ」

「……うん」

「どうした？　なんか暗くなって」

「……龍馬って、誰にでもああいうことするの？」

ああいうこと……さっきの子を抱きとめたことを言ってるのか？

「緊急時だけだよ。……それがどうかしたか？」

「うっん、だったらいいや」

？ 変な愛華。

「それで、『龍馬のことをどう思うか』って話だったよね？」

「ん？　ああ、そうだったな」

すっかり忘れてた。最近は物忘れが激しくなっていていかん。歳だろ
うか。

齢十七にして痴呆症。笑えない。

「龍馬ってA B型だったよね？」

「ん？　ああ」

「自分って素直だなーって思うこと無い？」

「よくある。というか、俺が素直じゃなかったことなんて無いぞ。基本的に自分の考えに嘘付かないようにしてるし」

「よくトラブルに巻き込まれるのはそのせいだよ」

「どういうことだ？」

「『自分に素直になれ』ってよく聞く言葉だけどさ、A B型の人は基本的に自分に素直すぎるんだよ。人を褒めたり、尊敬したりしてるの言うのはいいけど、^{けな}貶したりするときも口に出すでしょ？

それって、自分からごたごたに巻き込まれに行ってるのとそれほど変わらないんだよ？」

「そうだったのか……」

道理でやたら厄介事にばかり巻き込まれるはずだ。

「それに、龍馬って基本的にどう接したら良いのか分からないんだよ。自分では『素直な性格でこんなに分かりやすいのにどうして誤解ばかりされるんだろう？』と思うだろうけど、他人から見たら『この人、一体何を考えてるんだろう？』ってなるんだよ」

「なるほど……それで誤解が発生するのか……」

たしかに、普通ってた中学でこんなエピソードがあった。

あれは確か二年生のとき。テストが一週間前に迫ったある日、授業中に普通にテスト勉強をしてたら、

「お前は授業とテスト勉強、どっちが大事なんだ！」

と、怒鳴られたことがあった。

その時は確か、

「さあ……？」

とか答えた気がする。あまり覚えていないのは、どうでも良いことだったからだ。それよりもテスト勉強の方が大事だったし、普段訳あって授業に出れてない分隣のクラスの奴にノートを借りて、それを写す作業に一生懸命だった。

俺の記憶が正しければその時は延々と説教を聞かされた気もするけど、ずっと流してたから定かではない。それよりも、俺の唯一の苦手科目である日本史の範囲をカバーするのに必死だった。

その時から、職員室で『何を考えて行動しているのかまつたく分らない生徒』として一年半話題に上っていた。別にあんた達に分かってもらいたかったわけじゃない。俺の時間を削るような真似はしないで欲しい。一分一秒を大切に生きてるんだから。

「それに龍馬って、普段あまり考えて行動して無いでしょ？」

愛華の質問で意識をこつちに引き戻される。あのままだったら俺の中学時代の愚痴が延々と漏れ出すところだった。

過去はあまり気にしないでくせに、やたらねちっこいんだよな俺。

「例えば？」

「さっきの女の子を助けた時の。あれ、考える前に体が動いたって感じでしょ？」

「まあそうだな」

あの時は真つ先にパフェを掴んで、それをテーブルに置いてから女の子が倒れるのを阻止した。けど、それは頭でどうしようって考えたわけじゃなくて、自分の体が合理的な手順で動いたって言う感じだった。

「考えて行動してないから誤解も一人ひとりなんだよ」

「なるほど……道理でエルザとかにも誤解されるんだな あ……」

「ごめん」

「え？ 何が？」

「いや、女の子と二人でいるときに他の女子の事話すなんてデリカシー無いよな。ホントごめん」

「え……そんな、気にしなくてもいいのに……」

「？ なんか赤くなって俯いちゃったぞ。」

「……………」

おかしい。気遣って言った一言だったのになんでこんなに気まずくなるんだ。

アイスコーヒーのグラスに入った氷が立てる「カラン」という音だけが店内に響く。いつの間にか店内には俺ら以外の客はいなくなっていた。

いや、客だけではなく気付けば店員すらも
「ちよつといいか？」

突然横合いから聞こえた声に反応して左を向くと、武装した不良のような連中が俺らのいるテーブルを取り囲むようにして立っていた。

しまった。愛華と話すのに夢中で自分達の身に迫った危機を全く感じ取れなかった。

「何か御用ですか？」

愛華が場の雰囲気にとぐわなほんわかした感じの声でヤンキー共にそう訊ねた。この状況でそんな風にいられるなんて、ある意味大物かもしれない。

多分こいつらは愛華には手を出さないとと思うけど、俺の近くにいれば巻き込まれる可能性も大きくなる。

だったらいつそのこと

「愛華、防御魔法とか使える？」

「え？ 使えるけど？」

滅茶苦茶小声で愛華にそう聞くと、意外と呆気なく返事が返ってきた。

「それに誰に聞いているの？ 私は二年の中で最強の魔導師だよ？」
それは頼もしい限りだけど、状況が状況だったら滅茶苦茶怖い一言だったんだろうな。

愛華を怒らせないようにしよう。それが俺の身の安全に繋がる。

「よし。それじゃあ、俺が広範囲の攻撃魔法を仕掛けるから、お前は俺らの周りに防御魔法を展開してくれ。めっちゃ強力な奴」

「なんだかよく分からないけど、分かった」

状況が上手くつかめていない愛華には悪いけど、まあ後で説明するってことで。

「そんじゃ行くぞ。『重力球』！」

「『絶対防御の盾』！」

俺は建物自体を壊す勢いで全方位に身の丈もある重力球を発生さ

せると、周囲を取り囲んでいる人員の殲滅（せんめつ）に取り掛かった。重力球は動きは遅いが、物凄い吸引力で周りにあるものを吸引し続けるから特に不都合は無い。建物自体は後で大学の建築部門の人に頼めば三日で元通りにしてくれるらしい。

ついでに、愛華が発動させた防御魔法に俺はかなり驚いていた。

愛華の使った『絶対防御の盾』は水属性の最上位防御魔法で、物理的なダメージや魔法のダメージまで全てを防ぎ、ダメージを丸ごと魔力に変換するというゲームだったらバランスが崩壊するようなレベルの魔法だ（この学院に入ってから物事をゲーム感覚で考えられるようになってきた。やったことはないけど、今度ゲームでも作ってみようと思う）。

「ところで、何が起きてるの？」

「……………」

愛華はこれで本当に学年三位なんだろうか。危機管理能力がなさすぎる。

使っている魔法とかから考えると実力はかなりありそうだけど…

…もしかして、実戦経験が殆ど無いのか？

よくよく考えたら、愛華って少し天然入ってるところがあるし、昔から愛華のことはずっと仁が守ってたから危険を察知する必要が無かったのか？

……………そう言えば、愛華もA B型だったな……………。だからか……………。

「ミッションコンプリート。これより帰還する」

「誰に言ってるの？」

「そりゃ、もちろんスーク少佐に……………」

「?????」

駄目だ。やっぱり伝わらないか。

あれから五分。俺らを取り囲んでいた馬鹿共を片付けた俺と愛華

(愛華は殆ど何もしてなかった)は、寮に向かつて歩いていく。

それにしても、俺って漫画は読まないしゲームもやらないくせにやたら変な知識が入ってくるんだよな。なんでだろ？

「結局、あの人たちってなんだったんだろ？」

「気にすることでも無いだろ」

まあ、俺には全て分かってたけど。

さっきのは、エルザのファンクラブに入ってる馬鹿共だ。俺がエルザを怒らせたことに腹を立てて、復讐ふくしゅう？しに来たんだらう。

「勝てるわけ無いのにな……」

「????」

こちらら神流最強の男に組み稽古してもらってたんだぞ。この学院だったら仁や大和はともかく、名前も書かれないような雑魚共が俺に勝てるわけないだろ。

「そうだ。龍馬って、何部に入るかもう決めたの？」

「部活？ いや、まだ」

ってか、部活に入る必要があるのか？ 去年までいた神流学園じゃ風紀委員に入ってたから部活なんかやってる場合じゃなかったし、中学のときにも途中から帰宅部になったから(部員が俺一人になって潰れた)正直、部活に入る気なんて無いんだけど。

「愛華は何部に入ってるの？」

「私？ 私はバスケットだよ」

「たしか仁と大和もバスケットだったよな？」

「うん。まあ、仁は私がバスケットに入ってたからバスケットに入ってたみたいけど」

「ストーリーかよ……」

俺はあいつを警察に突き出すことをいい加減実行に移さないといけないかもしれない。愛華が好きなのは分かるけど、流石に行きすぎじゃないだろうか。

「でも、基本的に大学の工学部にしか顔出さないみたいだし」

「工学部？ あいつ理系得意だったっけ？」

「うん。文系は全然駄目だけど、数学と物理、化学だけは学年一位だよ」

「信じらんねえな……」

確か昔は全てのテストがのび太君状態だった気がしたけど……。

「でも、文系は相変わらず団子みたいだけど……」

「やっぱりな！」

団子 テストにおいて0点が連続することを示す。

「実際、大和君もいなかったら進級できたかどうか怪しいぐらいだったし……」

「そう言えば、大和って頭良いのか？」

「……文系は、ね」

その言い方って、まさか……。

「うん、龍馬の思っているとおり。大和君、文系はなんでも出来るのに、理系だけは団子状態なんだよね……」

「頭良さそうなのに……」

人は見かけによらないって事か。

「あれ？ だったら大和も進級が危うかったんじゃないのか？」

「うん。そこであの二人がやったのが、絶対にバレないカンニング」「絶対バレそうな気がするんだけど……」

っていうか、カンニングどうこうなんてこんな所で話してていいのか？ 『壁に耳あり障子に目あり』っていう諺どおり、誰がどこで聞いているのか分からないぞ。

「正確にはあの二人だけで実行したわけじゃなくて、バスケット部の男子全員で実行したんだよね。仁はSFとしては部で一番だし、大和君もSGとしては部で一番だから、みんな考えることは一緒だったみたい」

「何したかは大体想像つくな……」

多分、問題用紙に答えを書いて、書き終わったら何らかの方法で外部と連絡を取る。そしたら、連絡を受けた外部の人間が校内で騒ぎを起こす。そして、監督の教師の意識がそっちに向いた瞬間に問

題用紙を摩り替える。みたいな感じか？ っつて、あれ？

「この方法だと仁と大和が全く同じ教科で赤点取らないとならないな……」

それじゃあおかしい。だとしたら、どうやって『絶対にバレないカンニング』を実行したんだ？

「龍馬でも悩むんだね」

「ん、ああ。まさか俺に解けないトリックがあるなんてな……」

それ以外の方法だと……教室の外でカンペ？ いや、どう考えたってバレるだろ。

ケータイは……持ち込みすら禁止されてるだろうし。

読心術？ ……いや、無いな。監督の教師がその教科以外の担任だったら意味が無い。

「ん……」

いや、待てよ。視覚に頼ることを諦めればいいんじゃないのか？ 視覚以外で人に物事を伝える方法……触覚と聴覚……ああ、分かった。

「モスキート音か」

モスキート 直訳すると「蚊」だが、その羽音を解析し、若者にしか聞こえないほどの高い周波で鳴らす音。この学院の教師は、当然若い人もいるが、十代のように極端に若い教師もいない。つまり、モスキート音でモールス信号を使えば、教師には絶対にバレないカンニングをすることが出来る。

「考えたのは仁か？」

「うん。ああいうこと考えるの得意みたいだよ」

「なるほど、納得」

「それで、愛華はどうなんだ？」

愛華は昔から平均より少し出来るタイプだった。今も変わってないなら全教科70〜85つてところか。

「昔からあんまり変わんないよ？」

「どのぐらい？」

「えっと……先週の中間テストで平均点が78点だった」
「最高は？」

「ええっと……英語の91点かな？」

「最低は？」

「そこまで聞くの？ えっと……世界史の57点かな……」

「普通だな」

「そういう龍馬はどうなの？ 私より高いんでしょうね？」

「え？ わざわざ傷口にわさび醤油を塗りこむような真似をして欲しいのか？」

俺の前のテスト……神流は二学期制だったからな……ええと……

「日本史が98点だった以外は全教科満点だったな」

よく考えたらあのテスト惜しかったな。『織田信長』って書こうとしたら、なぜか『識田信長』になってたんだよな。

ちよつとしたケアレミスミスで減点。その問題は一問五点の文章問題だった。

「それまで全教科満点だったのに……」

「なんか、龍馬が言うのと嫌味にしか聞こえない」

なぜか愛華が不貞腐れてしまった。

「何で？」

「だって、龍馬って何もしなくても勉強できるイメージがあるんだもん」

ああ、そのことが。

「向こうにいた時は毎日三時間くらい勉強してたんだけど」

「ええっ!？」

「……何だよその驚き方」

軽く傷付いたぞ。

「だってさ、一つの科目につき三十分の復習をすれば、授業が一日六時間だから、それだけで三時間潰れるだろ？」

「……龍馬のキャラじゃない」

「は？」

「絶対おかしいよ！ 龍馬は私のイメージ的に、努力なんかしなくても何でも出来る天才キャラじゃないといけないの！」

「どんな理屈だよ、そりゃ……」

確かに才能はあると自負してるけどさ、勉強だつてなんだつて努力しないと他の奴に追いつけないだろ。

って言うか、今の愛華のキャラも俺のイメージと全然違うんだけど。これじゃあ、公衆の面前で付き合ってもいない男に熱烈ラブコールしてるようなものだぞ。

「部活か……」

自分の世界に入り込んでしまった愛華は放つておいて、俺は俺で部活について考えてみる。

体育会系……野球は……正直好きじゃ無い。

サッカーは……微妙。

テニスはボールがラケットに当たった瞬間にホームラン級の当たりになるからやだ。

バレーは……面倒。

水泳……俺、カナヅチだしな……。

陸上……ただ走り続けるだけなんて無意味にも程がある。

格闘技……飽きた。

バスケット……うん、いいかもしれない。暇つぶしにはなりそうだし。

次は文科系か……。

文芸部……そもそも文系が得意じゃ無い（苦手でもないけど）。

科学部……根暗ばっかのイメージがある。

放送部……どっこういう活動してんだ？

吹奏楽部……どっちかっていうと打楽器や弦楽器の方が得意だ。

漫画研究会……漫画とか興味ない。

美術部……絵を描くのは好きだけど、そればかりっていうのもな……。

「結論からすると、入部を検討する余地があるのはバスケットと美術

部か……」

「いつそのこと両方に入るか。この学院っていくつ部活に入っても問題は無いらしいし。」

「バスケット部に入るの？ だったら歓迎するよ」

「いつの間にか愛華が自分の世界から戻ってきていた。」

「まあ、検討する余地はあるよな」

「ふーん」

別に今すぐ決めないといけないうってわけでも ん？

「何だあれ……」

「え？」

「なんだか前方から土煙が……うわ……、マジか……。」

前方から部活のときに着るようなユニフォームを着た運動部員が物凄いスピードで走ってくるのが見えた。えっと、野球、サッカー、ハンドボール、バレー、陸上、水泳（競泳用水着で他には何も着てない）etc.。

「どこの部も考えることは同じなんだね……」

「は？」

「知らないの？ この学院は国立だから、各部に出る部費は少ないのが普通なの。だから一人でも多く部員を確保して、自分達の部に入る部費を増やそうってみんな考えるんだよ。入学式の次の日とか、ある意味戦争なんだから」

「なんとも面倒なシステムだな……」

「そんなシステムがあつたのか葉盟学院。俺が通つた神流は私立だったからよく分からん。部費なんて出さずともその部に所属してる金持ちが勝手に出してたし。」

「って、そろそろ逃げないとヤバイな」

「うん、そうだね」

すでに距離は百メートルを切っている。重力魔法で全員叩き潰すのもいいけど、それだと余計な反感を買う恐れがある。逃げるが勝ちか。

「あ、そうだ」

「ん？」

「あのね、後で私の部屋、来て欲しいな」

「いいけど……部屋いくつ？」

「0709だよ」

「分かった。少し遅れるかもしれないけど、絶対に行く」

「待ってるからね」

そう言い残し、愛華は転移魔法でここから去っていった。

「さてと」

逃げるか。

編入二日目、午後4時51分。俺は大量の男に追われるというかなり稀な体験とともにこう思った。

(早いうちに部活決めた方が良いな……)

その日、男共の追跡は一時間近く続いた。嬉しくねえ。

その頃の仁

「おい！ 圧力が規定値越えたぞ！」 仁

「圧力バルブ閉める！ ああくそっ！ システムにバグが発生してやがる！」 部員A

「馬鹿野郎！ 圧力バルブ閉めろって言ったのになんで開けてんだ！」 部員B

「容器内の圧力が高まってんなら開けるだろ普通！」 部員C

「んな事やってる場合か！ どんどん圧力強まってんぞ！」 仁

「分かってる！ あ」 部員B

ドツゴオオオオオオオオン！！！！

『……………』 全員

「……………おい」 仁（二年、学年一位）

「……………上等だよ」 部員A（二年、学年十一位）

「俺の言うこと聞かないからだろ……………！」 部員B（三年、学年八位）

「やんのかコラ……………！？」 部員C（一年、学年七位）

「上等だ！」 『アイズ・エイジ絶対零度』！」

「ライトニング・エスパータ雷の十刃』！」

「ゼルクス・マクルゼム針の筵』！」

「ディープ・ハザード屹立する水柱』！」

工学部部員の全員で魔法戦闘をしていた。

「何だ今の音……………」

遠くの方で何かが爆発するような音が聞こえたけど、この学院では普段から何が行われているんだらうか。

「まあいいや。えっと……………0907だったっけ……………？」

ずっと走りっぱなしだったから愛華の部屋番忘れた。

「この学院の奴ってみんなしてケータイ持って無いんだよね……………」
聞いた話だと、アーティファクトのカードに通信機能があるとかで、この学院内ではケータイを持つてる奴の方が珍しいという。メールは出来ないけど、簡単に意思疎通が出来るから一々充電しないといけないケータイより需要があるんだとか。

外部と連絡を取るなら部屋に一つ置いてある据え置き型の電話で事足りるらしいし、カードを額に当てて、話したい奴を頭に思い浮かべれば念話ができるらしい。

そのせいか、大和は文明から取り残されたイメージがあるからともかく、愛華や仁もケータイを持ってないから連絡手段が無い。

件の通信機能とやらを使ってみようかとも思ったが、カードを重ね合わせてその人の個人情報登録しないと使えないらしい（使お

うとしたら録音みたいな音声 flowed から、今の俺には連絡先が一つも無い。その人のアーティファクトを覚えていれば、自分でインストールして連絡を取ることも可能らしいが、俺が知っているのは仁の『絶対零度』、アイス・エイジ、『凍てつく爪』、大和の『風雲扇』ふうんせんだけだ。愛華のアーティファクトは知らない。

「どっちだったかな……0709か0907か……」

愛華も迎えとか来てくれれば良いのに。いや、それを望むのは我儂か。

「えっと……どっちだったか……」

こういう時は直感で動いた方が良いな。よし、0907だ。

その時選んだ番号が最悪の展開に繋がるものだと、俺は気付いてはいなかった。

「龍馬遅いな……どうしたんだろ……」

時刻は午後七時。来てくれるといった龍馬は、寮の前で別れたつきり何の連絡も無い。さつき大和君に連絡したときは、まだ部屋に戻ってきてないと言った。

「本当にどうしちゃったんだろ……」

約束を破ることなんて、小学校の頃は一度も無かったのに。私がどんなに無茶なことを言っても、龍馬は絶対に約束を守ってくれた。

やっぱり、龍馬は私のこと、好きじゃないのかな……。

「どうしたの愛華？」

「あ……灯……」

隣のベッドでファッション誌を読んでいた私のルームメイト、鬼灯灯が心配した様子で話しかけてきた。

「何か悩み事？」

「ううん、そういうわけじゃないの……」

「じゃあ困り事？ また竜堂君関係？」

「えっと……そうじゃなくて……」

「じゃあ……恋？」

「えっ？ ……………う、うん」

「恋！？ やつと愛華にも春が来たの！？」

「ちよつと灯……！ 声大きいっば……！」

必死で灯の口を押さえようとすると、灯は笑いながら自分の前に
防御魔法を展開した。いつも何故か防御魔法の展開だけ早い。私よ
りランク低いのに。

「ごめんごめん！ でも愛華ってそういう浮いた話、今まで一つも
無かったからさ。すつごくモテるんだから彼氏の一つや二つ作らな
いのかなーってずっと思ってたんだよ？」

「じゃあ灯は私のことどう思ってたの？」

「もしかしたらあたしに気があるのかな……って、うそっそ！ ご
めんって！」

「今度そういうこと言ったら沈めるからね」

私は召喚しかけたアーティファクトのカードを枕元に戻すと、さ
つきまで抱いていた猫の抱き枕に再び顔を埋めた。

「で、結局何があったの？」

「うん、あのね……」
かくかくしかじか。

「ふーん、星野君を、ね……」

「べ、別に何かしようとしたわけじゃないよ？」

「はいはい。奥手な愛華にはそういうことは期待して無いから」

「むっ、それってどういう意味？」

「あたしは彼氏いるからともかく、愛華はそういうことしたことな
いでしょ？」

「そりゃそっだよ！ 初めては……その……龍馬に……」

「はいはい、惚気ほけはまた今度ね。で、愛華はどっどこにどっどこにいるの
？」

「え？」

「星野君を迎えに行かないのかつてこと。多分彼、女子寮に入るのが恥ずかしくてここまで来られないんだよきつと」

「そんなものかなあ？」

龍馬に限ってそれは無いと思うけど……。

「そうだよ。あたしの彼氏だって最初はここに来るの躊躇ってたし」

「ちよつと待って。灯の彼氏がここに来たことなんて私知らないんだけど」

「あはは。愛華、目が怖いよ」

隠し事はしないようにしようって、私言っただよね？

ピンポーン。

「ほら、来たんじゃない？」

「後でゆつくりと聞かせてもらおうからね」

「う……うん……」

灯の怯え百パーセントの声をバツクに、私は部屋の扉を開けた。

「愛華！ 頼む！ 匿ってくれ！」

扉を開けた瞬間、龍馬が物凄い勢いで詰め寄ってきた。って、え？

「ちよ、どうしたの？ 何があったの？」

「今物凄く厄介なやつに追われ」

『待ちなさい変質者！ わたくしが灰に変えて差し上げますわ！』

「うわ！ やつぱり追ってきた！」

……なんだか状況がよく飲み込めないけど、大変なことになっているのは分かる。

「と、とりあえず中に入って」

「お、おう」

かなり慌てている龍馬を部屋の中に押し込み、私は部屋の外に出る。あのヒステリックな叫び方は多分エルザさんだろうけど、一体何があったんだろう？

「むっ、貴女は……」

「こんばんわエルザさん。どうかしたんですか？」

少し待っていると、階段の方から勢いよくエルザさんが出てきた。基本的に私はこんな喋り方はしないけど、エルザさんが相手のときは下手に動くより下手に出た方が問題も起きないと分かっている。

「わたくしの部屋に変質者が現れましたので始末しようとしているところですよ。姫城さんもお気をつけなさい」

「それは大変な事態ですね」

まったくですわ、と言いなながらぐちぐちと文句を漏らすエルザさんを横目に、私は被疑者の龍馬に事実確認を求めた。

「（エルザさんの部屋に入ったの？）」

『（愛華の部屋と番号を間違えたんだ。なんかシャワー浴びてたっぽかったから少し待ってただけ、部屋の中見てるうちに絶対に愛華の部屋じゃないと思ってさ、出ようと思ったたらタイミング悪くエルザが出てきて）』

今思ったんだけど、龍馬ってエルザさんのこと呼び捨てにするんだな……。昔は……。あれ？昔からこんなだったっけ？…

…まあ、いいか。

「（それで今に至る、ってこと？）」

『（その通りです……はい……）』

段々と小さくなってくる龍馬の声を扉越しに聞きながら、エルザさんの姿を見る。服装はバスローブで、長い金髪からは水が滴り、頬は上気している。

「全くあの庶民ときたら……。わたくしのことを散々侮辱した挙句、窃盗に覗きとは……。変質者はやるのが違いますわね」

『変質者じゃねえよ！』

「（馬鹿っ……！）」

「お待ちなさい。今その部屋の中からあの変質者の声が聞こえましたわよ？」

「あ、あはは……。気のせいじゃないですか……？」

龍馬の馬鹿！ せっかく助けてあげようとしたのにこれじゃあ台

無しじゃない！

「ちよつと中を確認させてもらいますわ」

そう言つてエルザさんが部屋の扉に手をかける。このままじゃ、龍馬は『覗き』『窃盗(?)』『恐喝(もしも龍馬が私達を脅して部屋に押し入つたと思われた場合)』の三連コンボで間違いなく退学になってしまう。

この場をなんとかして切り抜ければ、龍馬の身の安全はかなりの確率で確保される。エルザさんは男子への発言権はあつても、女子への影響力が全くと言つて良いほど無いから龍馬があらぬ疑いをかけられる心配は無い。加えて、私はこの学院では先生方にも生徒にも絶大な信頼がある。だから、もしもエルザさんが龍馬について誹謗中傷をしていても私が「彼女の言つてゐることはでたらめです」と言えば、みんながそれを信じる。

(なんか、ここだけ見ると私つてただの悪女なんじゃ……)
つて、今はそんな事をしてる場合じゃなかった。このままじゃ龍馬が見つかつちゃう。

どうしよう、何かいい方法は無いかな……?

『(愛華、扉から離れて)』

そんなことを考えていると、部屋の中から灯の音が聞こえた。本当に小さな声だったからエルザさんには聞こえてないっぽい。

私は一歩横にずれて扉の前から退くと、扉が勢いよく外側に開いた。

「っ!?」

けど、エルザさんも反応は鈍くないから、扉を両手で押さえた。
『チツ……』

「お待ちなさい！ 今中から舌打ちが聞こえましたわよ！」

「あはは。中に悪霊でもいるんじゃないんですか？ この学院つて前から『ナニカ』が出るつて噂がありますから」

ちなみに、そんな噂は無い。作られて十年ちよつとしか経つてないのに、そんな噂が飛び交つてゐるならいろいろと問題があると思う。

「見かけたら連絡しますから、そろそろ部屋に戻ったらどうですか？　いつまでもその格好だと変質者のいやらしい視線を全身で感じることになりますけど」

「　　ッ！！」

やっと自分の現状に気付いたのか、エルザさんは顔を真っ赤にして走り去っていった。

「ふう……」

一つ溜息をつく、龍馬が部屋から出てきた。

「助かったよ愛華！　この恩は必ず返すから！　じゃー！」

「え？　ちょ、ちょっと！　龍馬！」

龍馬は無言を言わさぬ様子で謝礼の言葉を述べると、踊り場から勢いよく空に飛び出した。

「って、ここ七階！」

高さは十六メートル。普通の人間なら死ぬ高さだ。

けど、龍馬は軽やかに着地すると、そのまま男子寮のほうへと走っていった。

「おー、すごいねー」

いつの間にか隣に来ていた灯がそんな事を漏らす。

「そう言えば今日の魔法の授業で星野君、重力魔法使ってたしねー」

「え？」

「時空間転移魔法まで使えるみたいだし、そのうち寝首搔かれるかもね」

さつきからまったく聞いた事の無い情報がたくさん聞こえる気がするんだけど、一体どういうこと？

「得意属性が闇みたいなこと言ってたし　　って、どうしたの愛華？」

「ねえ灯、私、そういう話一切聞いてないんだけど」

「あれ？　言ってなかったっけ？」

この調子だと他にもいろいろなることを知ってるはず。

「ちょっとお話ししようか」

「あ、あはは。やだな愛華。顔が怖いよ？」

「大丈夫。今日は寝かさないから」

じたばたと暴れる灯の首根っこを掴んで部屋に引きずり込む。

数秒後、女子寮に悲鳴が響いた。（自業自得）

起承転結で言う転の部分

「そう言えば、明日ランキング戦あるの知ってる？」

編入から三日目の昼休み、学食で昼飯の日替わり定食を食っていた俺のところに来た愛華がそう聞いてきた。

「ランキング戦？」

「うん。名前の通り、学年でのランクを決めるための勝負なんだけど、それを明日の実習の時間にやるんだって」

そう言えばそんなことクラスの誰かが話してたな。あまり興味が無かったから聞こうとはしなかったけど。

「ランクってなんか意味あるのか？」

「あるに決まってるんだろ」

背後から突然そう言われて振り返ると、そこには昨日と同じメガ盛り定食をトレーの上に乗せたチビが立っていた。

「お前今失礼なこと考えただろ」

「何を根拠に」

俺は人の身体的な特徴を挙げただけだぞ。

「まあいい。ここ座るぞ」

そう言っただけで俺は俺の左隣に座ってきた。男二人が並んでいるから若干窮屈かと思うかもしれないが、俺は右利きで俺は左利きだから実際はそうでもない。

「で、ランクって何の意味があるんだ？」

「とりあえず一番気になることを聞いてみる。」

「ランクってのは強さの象徴だ。この学院は実力至上主義だから、強い奴が偉くて弱い奴は淘汰とったされる。ランクが上になると当然それに応じた権限も与えられるし、一般生徒は閲覧えつらんが禁止されてる文献なんかも読むことが出来る」

それはまた、なんとも言えないことだな。

でも、仁が言っただけをそのまま受け取れば、ランクが上がれ

ば上がるほど色々なことがやりやすくなるって事だよな。俺の活動方針にはピッタリじゃん。

「そのランキング戦ってのはどうしたら出れるんだ？」

「お、やっぱり興味あるか？」

「そりゃあな」

勝負に勝つだけで偉くなれるんだろ？ 幸い、昨日の授業で重力ハビ魔法イモノを使えるようになったし、いざとなったら法术もある。

「まあ、それは俺が説明するより愛華が説明した方が早いだろ。と言っわけで、頼む」

そう言って仁は、表面上は湯気が上がらなくなったメガ盛り定食の親子丼の山を崩し始めた。それにしても、この親子丼、量多すぎないか？ 上に乗っかってる具だけで四百グラムって書いてあったけど、実際はそれ以上あるだろ絶対。

「えっとね、ランキング戦をやるにはまずエントリーしなくちゃいけないの」

愛華は仁の無茶なフリにも上手く対応している。

「エントリーは前日の午後六時までに、第一アリーナの参加受付まで行っつてするの。その時にアーティファクトのカードが必要だから忘れないようにしないとね」

「忘れるとどうなるんだ？」

「そのままだとエントリーが出来ないから、取っつてくるとか誰かに持っつて来てもらっつかするんだけど、この時期だとみんな転移魔法が使えるから持っつて来てもらっつ人はあんまりいないね」

そんなもんか。まあ、俺は最初から空間転移が使えるから問題ないんだけど。

「対戦相手はどうやって決めるんだ？」

正直に言っつと、俺は参加の仕方どうこうより相手が誰になるかの方が気になる。下位ランクの奴と上位ランクの奴が戦っつても勝負にすらならないだろっつし、ランダムだっつたらどんなに足掻いても勝てない奴とか絶対にいるぞ。

「対戦相手の決め方はよく知らないけど、対戦管理委員っていうところがその人に合った相手をぶつけるって聞いたことあるよ。それと、この人と対戦したい、あの人と対戦したいって言う人は、双方が同意すればその二人で対戦カードが作られるとも聞いたよ」

大体同じくらいの強さの奴と戦うことになるのか。でも、それだとランクって全然上がらない気がするんだけど。

「愛華って三位なんだよな？」

「うん。でも、私はランキング戦には出ないよ」

「何で？」

愛華の戦い方とか見たかったんだけど。

「私の戦い方だと近接戦じゃ絶対に勝てないし、あんまり戦うのも好きじゃないから」

そんなもんか。まあ、女子が「私、戦うの大好きなの！」とか言ったら軽く引くからな。エルザとかめっちゃ言いそうだけど。

「俺は毎回出てるからな」

左を見ると、既にメガ盛り定食の半分以上を平らげた仁がそう言った。

「お前っていつも誰と戦ってるんだ？」

学年一位と張り合える奴なんてそうそういないだろ。

「いつも大和とだ。たまには他の奴とも対戦したいんだけどな、誰も挑んで来ないし俺と同レベルの奴がいないんだよ」

なるほど。強くなりすぎた奴の末路か。

「でも、龍馬は今回出ても強い人とは戦えないと思うよ」

「は？ 何で？」

「編入したばかりだからランクがかなり低いはずだもん。ちょっとカード出して」

言われるがままに制服のポケットからカードを出して愛華に渡すと、愛華はなにやら操作をし始めた。

「ほら、これ見て」

操作をし終えた愛華が俺の目の前にカードを差し出してくる。そ

のカードには、さつきまでなかった数字が書かれていた。

「六千一？　なんだこれ？」

「それが龍馬の学年ランク。やっぱり最下位だね」

「そう言えばこの学年って六千人いたんだっけな。そこに俺が入ってきたから、俺はそのまま一番下につくことになるのか。」

「仁、龍馬ってどのくらい強いかわかる？」

再び仁の方を見ると、あれだけあったメガ盛り定食は既に食い尽くされていた。大食いチャンピオンかよ。

「そうだな……二桁ぐらいの強さはあると思うぞ」

「そんなに？　すごいじゃん龍馬！」

そんなに凄いことなのか？　二桁じゃそうでもない気がするけど。

「そんなことないよ！　私が二桁まで行くのに四年かかったもん」
四年って……そんなに大変なことだったのか。

「多分最初の勝負だと五千五百位ぐらいが相手になると思うけど、物凄い強い攻撃で一発ノックアウトとかすれば、次の勝負で三桁が上手く行けば二桁と勝負できると思う」

物凄い強い攻撃か……。やっぱりあれしかないのかな……。

「そろそろ昼休みも終わりだな。教室に戻るか」

そう言っただけで仁はトレーを片手にさっさと歩いていってしまった。

「それじゃあ私も戻るね。次の授業体育だから着替えなくちゃいけないし」

愛華は転移魔法を使って俺の目の前から消えた。

「ひとつ気になるんだよな……」

俺は自分の目の前に置かれたトレーを見る。そこには、まだ半分以上の飯が残っている。

「あいつら食うの早くねえか……？」

仁なんてあのメガ盛り丼を五分足らずで平らげるし、愛華も俺と同じタイミングで学食に来たはずなのにもう食い終わってる。大和にいたっては三分もあれば飯とか食い終わるし。

結果的に、五時間目の授業の直前になるぐらいまで俺は一人で飯

を食っていた。

「はい、それでは今日もいつものように魔法の授業をやっていきますよー」

今日の魔法の授業は第六アリーナで二十一組と合同。

「明日は実習の時間を使ってランキング戦をやるので、今日はより実戦的な魔法を使った実技訓練を行います。丁度学年一位と二位の生徒さんがいるので、彼らに模擬戦闘をやってもらいましょう」

月詠先生がいつもの調子でそう言うと、すでにやる気マックスの仁と、少し沈んだ顔をした大和が出てきた。

「神羅木君、どうかしましたか？」

先生も大和の異変に気付いたみたいで、心配そうに声をかけた。

「また仁とやらないとならないのか……」

ああ、納得。仁とやるの疲れそうだし。

ちなみに、こういう事がある度に大和は仁の相手をさせられてるらしい。代われるものなら代わってやりたいけど、残念ながら今の俺じゃ仁に魔法で勝つのは不可能っぽいし、さっき愛華に聞いた限りだと、仁は氷属性魔法しか使えない代わりに氷魔法においては学院で一番強いらしい。

昨日俺が聞いた大爆発のような音も、九割がた仁が引き起こしたものとみえたかったし。事実、昨日の夕方頃から大学の工学部が冰山みたいになってたって今日の朝、月詠先生が嘆いてた。

「なんだったら二対一でもいいぞ。それでも絶対負けられないけどな」

「お前の相手をしようとする奴がそもそもいないだろ。自分の実力考えろ」

「はははっ。俺に勝てる奴なんてこの学院には存在しないからな」

仁は心の底から本気で言ってるっぽい。っていうか、ここまで言われて立ち上がるうとする奴はいないのか？

周囲を見回してみるけど、そういう気概のある奴はただの一人もいないっぽい。なんだ、仁ってそこまで強いのか？

「（なあ委員長、仁ってそんなに強いのか？）」

丁度隣に座っていた委員長に声をかける。すると、委員長も俺と同じようにひそひそ声で返してきた。

「（うん。多分この学院では先生や魔導騎士団全部差し置いて一番強いと思う）」

「（魔導騎士団？）」

「（うん。魔法世界は知ってるでしょ？ そこから直接派遣された戦闘部隊みたいなものかな？ 魔法戦闘だけじゃなくて、近接戦闘までかなりのレベルでこなすから、魔法世界では実質最強の軍隊みたいな扱いになってる）」

大和にちらつと聞いたことはあったけど、そんなのがこの学院にいたのか。

「（先生って言うのは？）」

「（この学院の先生は全員魔法教師なの。魔導騎士団と同じように魔法世界から派遣された人たちなんだけど、簡単な話、全員が大和君クラスだと思っくいよ）」

じゃああの月詠先生も大和と同じくらいの戦闘力があるのか。この学院に来て驚くことって沢山あったけど、これも結構驚くことの一つだぞ。

「（その中で一番強いのか？）」

「（そう。実際はもつと強い人とかいるかもしれないけど、三年生の一位は竜堂君に負けてるし、去年学院最強って言われてた人は竜堂君に氷漬けにされてたから）」

「（……………）」

あいつ、無差別に人を殺すイかれた犯罪者か。どんだけ学院で名前挙げてんだ。ここは昭和の工業高校じゃないんだぞ（この話をし
て分かる人は俺らの世代にはほとんどいない）。上等工業の山田か。
「仕方ない。仁、俺が相手してやるよ」

このままだと話が一向に進まないし、そろそろ主人公っぽいこと
もしておかないと物語が成り立たなくなりそうだし。

けど、仁の反応は

「お前が？ 無理だつて止めとけ。まだ死にたく無いだろ？」

鼻で笑われた。

「絶対にそのツラ、泣き顔に変えてやるからな……！」

「上等だよ……！ 身長のでかさが代わっても優劣は何も変わって
ないってことを体に刻み込んでやる……！」

あ、やっぱり気にしてたのか。小さいやつめ（器と身長が）。

「ぶつ殺す！」

「こつちの台詞だ！」

俺の考えが読めたのか、仁が飛び掛ってきた。

「来たれ！ 『凍てつく爪』！」

アーティファクト、分類ツインダガー。見た感じは、切れ味より
も攻撃力を重視した物っぽい。恐らく、凍らせた対象を砕くために
使うようなものだろう。

だが、そんなものは間合いに入れなければいい。

「空間転移！」

俺は自分の目の前の空間にワームホールを発生させ、そこから異
次元に安置してあるものを掴み、一瞬にしてそれを抜き放つ。

俺の動きに気付いた仁は、空中で制動をかけるとサマーソルトを
するように真後ろに飛び上がった。どうやってんだらう、今の。

「それがお前の武器か？」

「ああ。俺の愛刀、賤刀『珀凧』だ」

見た目は物凄く長い刀。分類的には、『長刀』と呼ばれるものだ。
刀身が三メートルあって、柄の部分と合わせると三メートル五十
センチほどある。同じ読み方で『薙刀』っていうのがあるけど、そ
うちは柄の部分が長くて刀身はそこまで長くないものを差す。

ただ、一般的な刀と違うのは、軽いことだ。

普通の刀は玉鋼から造られた硬鉄と軟鉄から成る。そのため、重

さとしてはかなり重くなる。

大河ドラマとかだと、日本刀で人を何人も切り倒すシーンがよく見られるが、実際はあんな風にはならない。人を切ると脂肪が刀身に付着して切れ味を鈍らせるし、骨に当たれば刃が欠ける。相当に訓練（修行）をして刀身に何らかの力を働かせないと、そのままでは武器としての価値なんて殆ど無い。

昔は刃を研がずに硬さと重さだけを重視し、破壊力だけに特化した『研無刀』^{けんぶとう}というものもあったが、やっぱり根本的な脆弱性は改良できなかったために世の中に広まらなかった。

俺の愛刀である賤刀『珀風』も、普通だったらただの脆弱な刀ではない。それどころか、刀身が長くて軽い分、折れやすいというリスクも孕んでいる。そう、普通だったら。

珀風は、自然界には存在しない超金属、ゼノグライト鋼という超合金から作られている。金属としては有り得ないほど軽く、それでいて硬く、柔軟性もある。

そこに俺の法術で強化術を施し、武器としての性能は極限まで高まっている。俺が作った武器の中では最高傑作だ。

「リーチに差がありすぎるな……」

「どうする？ 何ならハンデくれてやってもいいぞ」

「ほざけ。こつちのセリフだっつーの」

仁もリーチの差は痛烈に感じているようだが、まだ自分が負けるような状況には陥ってないと思っっているんだろ。

けど、こつちもいつまでも魔法が使えないわけじゃないんだぞ。

「『重力球』！」

前方に重力魔法を撃ち出し、それを仁に向けて射出する。普通に全方位に出した場合はゆっくりと追尾するだけだけど、一発だけなら自分の好きな方向に射出が出来る。

「重力魔法か。だったら 四式魔法陣展開。『凍る世界の断頭台』」

仁が魔法陣を召喚し、魔法名を口にした瞬間、俺の頭の上に超巨

大なる氷の斧が召喚された。

「その程度の攻撃、俺には当たらず」

右に飛んで避けようとしたが、体が動かない。何故 答えは簡単だ。

体が、凍っていた。

「うっ、ウソだろ!?!」

「セリス砕ける」

仁がそう口にした途端、氷の斧が勢いよく振り下ろされた。

万事休す。絶体絶命って奴か。

「なんてな」

俺にはまだ秘密兵器ってやつが残ってるんだよ。

「リム・グリッター空間制御。俺の体表面の摩擦力をゼロに」

その瞬間、体に食い込むようになっていた氷が皮膚から剥がれたような感覚がした。

刹那。ズズウウウゥン!! という音と共に、氷の斧がアリーナに突き刺さった。

「やっぱり、ただの素人が学年一位に挑むこと自体無理があったんだ」

第六アリーナにいた二年二十一組と二十四組の生徒は誰もがそう思っていた。事実、この学院での龍馬の立場は「重力魔法を使えるらしいけど戦闘経験の殆ど無い素人」だ。仁や大和、愛華と共に行動することが多いため、普通の人間ではないとは思われているが、それでもやはり、龍馬はランクの低いただの生徒なのだ。

アリーナのメインフロアには、仁が上級魔法で召喚した『凍る世界の断頭台』による大斧が突き刺さっている。未だフロアには砕け

た氷が細かな粒となって充滿しているため、龍馬がどうなったかを確認できる生徒はいない。

『凍る世界の断頭台』は、氷属性魔法の中でも一、二を争うほどの攻撃力を持った広範囲魔法だ。術者の十メートルほど上空に召喚された大斧に気を取られているうちに、足元を凍らせて自由を奪う。躲そうとしても足が凍っているために身動きがとれず、自分でもよく分からないうちに潰されるといういやらしい魔法だ。

だが、氷属性の魔法の特徴としては、基本は動きを止めることから攻撃に繋げる。いわゆるチェインというテクニクなのだが、仁と同じレベルで氷属性魔法を使える生徒が葉盟学院には存在しない。そのため、攻略不可能の男と呼ばれているのだ。

「やっべ……殺っちまったか……？」

少し冷静になった仁がそんな声をあげる。仁としては手加減をしたらつもりだったが、力のセーブが若干苦手なため、ついつい力がいりすぎてしまったのだった。

しかし

ピシッ

「あ？」

アリーナに突き刺さったままの大斧に亀裂が入ったような音がメインフロアにいる全員の耳に響いた。そして、その音は段々と断続的に聞こえるようになり、その音が一瞬鳴り止んだ次の瞬間、ガッシャアアアアアン！！という音と共に氷の斧が砕けた。

「やれやれだぜ……」

もくもくと上がった粉塵の中から聞こえたのは確かに龍馬の声だった。だが、アリーナの中にいた生徒の殆どは我が耳を疑った。まさか、と。

「大した奴だよ。摩擦係数をゼロにして威力を殺しきれなかったのはお前が初めてだ」

「なっ
」

「ま、これで大体分かった。魔法陣の構成も、どうやったら強い魔法が使えるのかも、全部な」

それはハツタリなんかではない。龍馬は法術が使えないと仮定すれば至って普通の人間だが、三つの事においては常人をはるかに超えるほどの能力がある。

スーパーコンピュータ並の分析と演算能力、そして、周囲の状況を一瞬で把握してその時々で一番効率の良い行動に繋げるための空間把握能力。この三つのおかげで、龍馬は常人には為し得ないほどの戦闘能力を得ることが出来ているのだ。

「こっから先は俺の独壇場になるけどよ、いいよな？」

龍馬は長刀を左手に持ち替えて言う。その口調には、はつきりと自信が感じられた。

そして、龍馬には法術を使い始めていたときから考え、しかし実際には使えなかったものがあつた。理論上は既に完成した、現在の地球で最強の兵器と言われている核兵器など比べ物にならないほどの威力を持つその技を。

「いいぜ、やってみろよ」

仁は楽しみに言う。それも当然。仁が使った『凍る世界の断頭台』から無傷で戻つて来たのは龍馬が初めてだったからだ。時々この魔法を受ける大和でさえかなりの大怪我を負うのに、龍馬がかわ躲したのかどうかは分かっていないが、何かを感じ取つたのだ。

「言つとくけど、手加減できないからな。なんて言つたつて、これを使うの自体初めてなんだからな」

「だったら俺が氷属性の究極魔法をお見舞いしてやる」

ちなみに、仁のこれもハツタリではない。仁はこの学院では唯一究極魔法を使える生徒なのだ。そして、その事は仁が学院最強であることも示しているのに、龍馬は気付いた。

「じゃあ俺は、『閻属性の魔法』つてのを見せてやるよ」

「なっ
『!?!?』」

龍馬の一言に生徒全員が本気で驚いた。

だが、それもそのはず。龍馬が閻属性の魔法を使えることはその場にいる人間では三人しか知らない。龍馬のクラスの担任である月詠曆とルームメイトの神羅木大和、偶然その事実を知った竜堂仁の三人だけだ。残りの二百人弱はそのことすら知る余地は無かった。

「いいぜ、来いよ」

「おう。 四式魔法陣展開」

龍馬が魔法陣を召喚した瞬間、周囲の状況は一変した。

地面からは黒い瘴気のようなものが吹き上がり、メインフロア内のLEDライトは突然寿命が切れたかのように光を失った。その異変はそこにいた生徒や教師にも適用され、突然倒れる生徒が複数一斉に出た。そして、倒れた生徒は例外なく学年でのランキングが三桁以下の生徒だけだった。

「『降り注ぐ死の炎』！』」

龍馬が魔法の名を叫ぶと、アリーナの天井付近から一本の光が落ちた。そして、光は地面に着弾すると同時に膨大なエネルギーが着弾の衝撃で膨れ上がり、超高温の熱波と衝撃波がアリーナを揺らした。

「失礼しました……」

その後、俺は月詠先生に連れられて反省室まで来ていた。幸い、仁が咄嗟とつぱに使った氷属性の防御魔法と大和の風魔法で奇跡的に怪我人はゼロ。アリーナ自体も、所々に亀裂が入っていたが大した損害は無かった。

ただ、俺は他の生徒にも危険が及ぶ魔法を使ったということそのまま反省室に連行され、一時間半近く延々と説教を聞かされる羽目になった。

「やっぱりやりすぎたか……」

冷静になって考えてみると、この魔法の威力って核兵器以上なんだから他の生徒にも注意を促す必要があったんじゃないだろうか。

俺が使った『降り注ぐ死の炎』は、エネルギーを超高密度で圧縮し、着弾と同時にエネルギーを押さえ込んでる力とは別の力が加わって暴走、大爆発を引き起こす超広範囲のものだ。分類的にはもしかしたら火属性の魔法になるのかもしれないけど、火属性魔法に「フレア」の文字は無かったから闇属性魔法で定着させても問題は無いだろう。

「お勤めご苦労さん」

「あ？」

顔を上げると、そこには大和と愛華が立っていた。なかなか珍しい組み合わせだ。

「お勤めって、俺は組のモンか」

「悪い事して反省室に入ってたんだから『お勤め』で間違い無いだろう」

「別に悪い事したつもりは無いんだけどな」

多分、大和がここに来たのは冷やかしのためだろう。愛華は本気で心配してくれるだろうけど、仁も同じような

「あれ、仁はどうした？」

ここには俺と大和、愛華以外にいるはずの仁がいない。あいつの性格だったら真っ先に飛んできそうなものだけだ。

「あいつだったら部活に行ったぞ。昨日大学の工学部で派手にドンパチやらかしたらしいから、その復旧作業だよ」

「ああ、なるほどな」

昨日の大爆発の原因はあいつか。まあ、仁だったらそのぐらいやりそう。

「しかも反省文十枚だってさ。ホント馬鹿だよなあいつ」

「俺より多いのかよ」

ちなみに、俺の反省文は二枚だ。初犯だからそのぐらいで勘弁してくれるらしい。

ついでに、この学院では生徒同士の魔法戦闘には特に関与しないが、全く関係の無い第三者に危害を加えた場合は問答無用で反省室に連行されるらしい。緩いのか厳しいのかよく分からない学院だ。

「それで、龍馬はどうするの？」

「何を？」

「ランキング戦だよ。出るの？」

そう言えばそんなのあるって言ってたな。すっかり忘れてた。

「出るなら早く行かないと間に合わないぞ。受付時間過ぎると担当の先生帰っちゃうからな」

「受付時間って何時までだ？」

「六時だ」

となると、あと一時間ぐらいか……。

「大和は出るのか？」

「出るっつーか、強制的に出される。ランキング一桁の奴は基本的に強制参加なんだよ」

「そりゃ、なんっつーか……大変だな」

ん？ ということは、愛華も出るのか？

「うん。と言っても、私の場合は対戦相手があんまりいないんだけどね」

「何でだ？ 他の強制参加の奴らとやるんじゃないのか？」

「普通はそうなんだけど、私ってメイジでしょ？ ファイターとかスカウトだとハンドレが大きいから私と対戦したい人がいないの」

愛華の言うメイジっていうのは、いわゆる魔法使いのことだ。この学院にいる生徒は全員魔法使いなんだけど、戦闘の傾向によってその呼ばれ方が変わる。

たとえば、大和みたいに近接戦闘を基本にあまり魔法を使わないで戦う人の事をファイター、仁のように近接戦闘も魔法戦闘も同じぐらいの頻度で行う人の事をスカウトという。スカウトの場合は、大抵攻撃速度や移動速度が速い人が多い。

メイジは愛華やエルザみたいな、基本的に魔法戦闘だけで近接戦

闘を殆ど行わない人を指す。そしてもう一つクレリックというクラスがあつて、そっちは光魔法の回復を基本的に行う、いわゆる衛生兵というやつだ。この学院にもそこそこいるらしい。

そして、使う武器にも傾向が顕著に表れる。例えば、大剣や斧、長剣なんかを使う人は基本的にファイター。短剣ダガーや小剣ナイフなんかはスカウト。杖やロッド、補助武器のアクセサリや本などはメイジやクレリックに多い。ただ、クレリックの中にはハンマーを得意武器として使う人もいるらしい。

俺の場合は、基本は刀（長刀）で攻撃。相手に隙が多く、簡単に距離を取れる場合は魔法（法術）みたいな形になる。だから分類的にはファイターだろう。

「ハンデってどういふのがあんだ？」

「うーんと……確か……」

「魔法防御力を下げるために制服及び体操服、ジャージの着用禁止」
「そう、それ」

「制服脱いだからって何か変わるものなのか？」

「せいぜい衝撃に若干弱くなる程度だと思っただけだ。」

「そうでもないぞ。うちの学院の制服は魔法力体の糸で織り込まれてる。ありとあらゆる魔法の効果を軽減し、至近距離から撃ち込まれた銃弾の威力も完璧に吸収するし、薬品からも守る特別仕様だからな。そうじゃないとファイターとメイジが戦った場合、そうなる」とメイジが圧倒的な不利になるんだよ」

「逆にファイターは敵の魔法攻撃をほとんど気にする必要がなくなるから、メイジ相手だとかかなり有利になるの。スカウトやクレリックも同様に、ね」

「そんな便利な物だったのか葉盟学院の制服。下手したら防弾チョッキや警察の機動隊が使ってる強化ポリカーポネイドの盾より役に立つな。」

「まあいくら衝撃に強いつても、魔法で強化した武器の攻撃とか、魔法銃の魔弾とかは完全には防げないからそこまで完璧じゃ

ないけどな」

「そんなもんか」

ありとあらゆる魔法の効果を軽減するってことは、そのおかげで怪我人が奇跡的にゼロだったのか。先生達があれだけ起こってた理由も分かる気がする。

まあ、九割方流しながら聞いてたけど。今じゃ何言ってたかなんて覚えてない。

「でも、龍馬は今のところ学年最下位だからハンデとかはつかないと思うよ」

それはラッキーなんだけど……なんか舐められてる感じがするんだよな。

「そう言えばさ、さっきの仁の魔法から無傷で出て来たの、あれってどうやったんだ？」

「ああ、『凍る世界の断頭台』のことか？」

別に話しても良いんだけど……なんか後々面倒なことになりそうだな。

「えっ？ 龍馬、仁とやったの？」

「そろそろ主人公っぽいことしておかないと、話的にまずいかなって思ってたさ」

「？ 主人公？」

「いや、こっちの話」

お騒がせで無能なトラブルメーカーの烙印を押されることだけは避けないと。売り込みはあくまでも「普通の人間には使えない特殊能力を持った天才高校生」なんだから。

「流石に無理があるかなって思ったけど、意外と単調な攻撃だったから受け流すのは簡単だったぞ。まあ、もうちょっと遅かったら圧死してたんだろうけど」

「受け流した？ あの氷の表面温度はマイナス231度だぞ？」

ああ、どつりで受け流した後に強烈な冷気が襲ってきたってわけだ。まあ、体表の摩擦係数をゼロにして、体の表面に反発力を発生

させたら結果的に俺へのダメージもゼロだったけど。

「まあ、詳しい部分は秘密だ。企業秘密ってやつ?」

「言いたくないならそういうことにしといてやる」

あれ? 意外と簡単に引いたな。まあ、大和のキャラ的には「しつこい奴」より「さっぱりした奴」なんだろうけど。

「それよりも早く行かないと受付時間過ぎちゃうよ」

「ああ、そうだったな」

今の時間は午後五時十二分。意外と話し込んでたみたいだ。

「そんじゃ行くか」

その時の俺は、意外と晴れやかな気持ちだった。

この学院のレベルってそこまで高くないのかもしれない。まあ、海斗と比べたらどんなに強い奴でも子ども扱いだろうけど。

こっちは和真とか有り得ないぐらい強い奴らと普通に修行してたし……ヤバイ。思い出したくない過去のトラウマが……!

「????」

そんな俺を見て、愛華は頭の上に?マークを大量に浮かべていた。

第一アリーナに着いた俺を待ち受けていたのは、なんかもう見慣れた光景だった。

「お待ちしていましたわ」

「……待っててくれなんて頼んでないんだけど……」

第一アリーナの正面玄関で、なんかもう相手にするのすらも面倒になってきた学年四位のお嬢様が待ち構えていた。その後ろには従者 ファンクラブの会員 が数十人。紅南高校の番長か。

「お待ちなさい。なぜ何も言わずに通り過ぎようとしているんですの?」

一団を避けて中に入ろうとすると、エルザが静止を促してきた。まったく、どこまでいっても面倒な女だ。愛華とは大違いだ。

「そう思うならまず用件を言ってくれ。俺はランキング戦にエントリーしに来たんだから、早くしないと受付時間過ぎちまうんだよ」「反省室から第一アリーナは歩くと三十分くらいかかる。そのくらいだったら余裕で間に合うから急がなかったんだけど、六時まであと十五分ぐらいしかないので何か用事があるならさっさとすませてほしいものだ。」

「貴方もランキング戦に出るつもりですか？」

「そう見えないなら俺はここに何しに来たんだろつな」

そんな分かりきったことを聞くだけならさっさと解放してくれ。

こっちは一分一秒でも惜しいんだ。

「用はそれだけか？ だったら俺は行くけど」

「わたくしがその程度の用でわざわざ出向くとも？」

じゃあさっさと用件だけ伝えてくれ。ほら、愛華と大和がさっさと中に入っていただろうが。

「用というのは他でもありませんわ。明日のランキング戦でわたくしと戦いなさい」

「お断りだ」

何でお前みたいな面倒な奴と戦わないといけないんだ。

「そもそも、何で俺みたいな学年最低ランクと戦いたいんだよ。愛華にすら勝てないからって弱いもの苛めか？ 褒められた行為じゃないぞ」

「お黙りなさい！」

なるほど、愛華に勝てないっていうのは凶星らしいな。というか昨日は実際に戦ったことがないって言うってたけど、実際は何度か戦ったことがあるみたいだ。じゃなきゃここまで露骨な反応をするはずがない。まあ、仁や大和と戦ったことがないって言うのは本当っぽかったけど。

「わたくしは好き放題にやっている貴方に忠告をしに来たのですわ」「へえ？」

さっきと目的変わってるけど？

「この学院で無事に生活したいならあまり敵を作らないことですわ。自分で言うのもなんですが、わたくしを敵に回せばわたくしの後ろにいる全ての生徒を敵に回すことになりますわ。それでもよろしくつて?」

「別に構やしねえよ」

なんかもうホントに相手するのが面倒になつてきた。六時まであと十分ぐらいしかないし、適当に切り上げてお帰り願おうか。

「最終的にはこの学院の生徒 いや、この学院にいる全ての人間が俺らの敵になるんだから関係ねえな」

ちなみに、完全にハツタリだ。けど、「俺ら」つて言えば、俺の後ろに何か強力なバックがいるんだと勘違いさせることは出来る。

まあ、実際に物凄い強力なバックがあるっちゃあるけど。

「まさか、戦争でも起こす気ですか?」

「どこまで飛躍してんだよ……妄想癖でもあるのか?」

「なっ! わたくしはそんなことは考えませんわ!」

「どうだか。人の言ったことを全然違う方向に解釈して勝手に暴走するし、妄想癖があるつて考える方が自然だろ」

「うぐぐつ……!」

エルザは今にもハンカチを取り出して喰いちぎりそうな顔になっている。羞恥心が屈辱か知らないけど、耳まで真っ赤だ。

……なんか、今思った。

「このお嬢様、弄ると結構楽しい……?」

「そんなに構つてほしいなら後で夜の遊戯でも教えてやるうか?」

「なっ! 何を言い出すんですの! わたくしは……そんな……」

しかもかなり純情っぽい。だんだんと尻すぼみになっていく声が少しいじらしかったりする。

多分、初体験も済ませてないんだろうな……まあ、貴族なんてそんなものか。箱入り娘とか多そうなイメージあるし。

ちなみに、さっきからエルザのファンクラブ共は猛烈な殺気を俺に向けている。ここで襲い掛からないのは、エルザと俺の距離が五

メートルもないからだろう。その上、エルザは自分の世界に入り込んで戻ってくる気配がない。

……俺と関わる奴って、妄想癖がある奴が多いな……なんでだ？
「龍馬ー、早くしないと先生帰っちゃうよー」

いつまで経っても来ない俺を心配したのか、愛華が呼びに来た。

「おう、今行く！」

このままここにいても仕方ないし、さっさと受付を済ませよう。

俺はエルザを横目に、アリーナの中に入った。

アリーナの中はどこも同じで、市営の体育館と殆ど同じような造りになっている。入り口の左側に道場のようなものがあって、その手前には二階に繋がる階段。入り口の右側には救護班が常駐している医務室に、ちょっととした会議室のようなもの。それに、そこそこ大きな倉庫が隣接されている。

アリーナのメインフロア（ちなみに、アリーナの入り口が南側にある）には、東側に男子の更衣室とトイレ、西側には女子の更衣室とトイレに行くための自動ドアがある。メインフロアは木を張った床と、一面に土が敷き詰められているものがある。第一アリーナは土のほうで、基本的に運動靴やスパイクなどの外履きで使用する。そのため、体育祭の時とか、運動部が雨の日に練習に使うことが多いそうだ。

で、入り口の近くに一つの長テーブルが出され、そこにやたら眠そうな目をした教師と、やたら神経質そうな眼鏡をかけた教師が座っていた。

「ランキング戦の参加希望者ですか？」

訝しげに見ていると、神経質そうな教師が眼鏡の奥にやたら張り詰めたものを感じさせる視線でそう訊ねてきた。

「一応そうですね」

「でしたら、カードを出してください。それで認証します」

そう言われて、俺はブレザーの右ポケットからアーティファクトのカードを取り出す。それをテーブルの上に置くと、何やら操作を

し始めた。

「照合　二年二十四組七十四番、星野龍馬。現在の学年ランク、六〇〇一位。得意属性、闇。間違いありませんか？」

「はい」

神経質そうな教師とは真逆で、眠そうな目をした教師の方は何かをする気配が全くと言って良いほど感じられない。正直言って、無能っぽい。

まあ、エントリーが滞りなく行われてるみたいだからなんでもいんだけど。

「　登録完了。カードはお返しします」

そう言われて右手を出すと、その上にカードを置かれた。

「対戦相手はこちらの方で抽選という形になりますが、よろしいですか？」

「はい。それで　」

「お待ちなさい！」

いいです、と言おうとした矢先、俺の言葉を甲高い声が遮った。

あまり振り返りたくもないが、振り返らないと下手したら炎をぶつ放される可能性も無きにしも非ずだから振り返らざるを得ない。

そして、振り返るとそこには修羅がいた。

どうでもいいことだけど、修羅って日本の中で火を司る神様なんだよな。そう、今のエルザみたいに背後に吹き上がるような炎を従えて　炎？

「わたくしのことをからかった拳句、何も言わずに素通りするとは良い度胸ですわ！」

「勝手に自分の世界に浸りこんで戻ってこなかったのはお前だろうが！」

有り得ないぐらい理不尽な言い分のエルザに半分キレる。残りの半分は　まあ、アレだよ。

ほら見る。愛華と大和はともかく、あの神経質そうな教師まで口ポカンだぞ。

「ともかく、明日のランキング戦でわたくしと戦いなさい！」

「何でだよ！ 大体、俺とお前じゃ勝負にならないのは目に見えてるだろうが！」

「そのとおりですわ！ わたくしの一方的な勝利で幕を閉じますもの！」

「そういう意味で言ったんじゃないやねえ！」

ああもうこのお嬢様はどう言ったら退いてくれるんだよ。大体、大和相手にあそこまでやられてるんじゃないや俺との差なんて火を見るより明らかだろ。

「何故わたくしと戦いたがらないんですの！」

「逆にお前は どうして俺と戦いたがるんだよ！」

そんなに戦いが好きなら俺の幼馴染に戦闘狂がいるから紹介してやる！

「っ！ 分かった！ だったら好きなかだけ相手してやる！」

その結果として泣いても責任取らないからな！」

「誰が泣くと言っんですの！？ 大泣きして土下座するのは貴方の方ですわ！」

「その言葉そっくりそのままお前に返してやる！」

どう考えても勝つのは俺だろうけど、手加減する気も失せた。若干大人気ないかもしれないが、そんなの構ってられるか！

「ということですので」

「俺の対戦相手はこのお嬢様だ！」

「は……はい……？」

神経質そうな教師は状況が全く飲み込めていないようだ。まあ、俺もその立場だったらきつと困惑してるだろう。

「ふふっ」

エルザが優雅に微笑む。って、まさか……。

「嵌めやがったな……！」

「そういうことですので。明日を楽しみにしていますわ」

そう言っってエルザは去っていった。

「やつちまつたな龍馬。風属性の魔法だったら教えてやる」
「私も、水属性の魔法だったら教えられると思うけど……」
大和と愛華が優しく声をかけてくる。持つものは友人だな。
だが、嵌められたことにショックを受けた俺は、数分の間反応で
きなかった。

「つたく……なんで俺がこんなこと……」

授業が終わった後、俺は大学の工学部で構内の修復作業に追われ
ていた。

昨日は作業中にシステムがエラーを起こして暴走。バルブ内の圧
力が急激に上昇して、バルブ自体が圧力に耐え切れず爆発。それで、
責任の押し付け合いになって魔法でバトルが勃発。工学部は高ラン
クの奴が集まることで有名で、全員で上級魔法を使ったら建物が崩
壊。機械とかは全部駄目になって、今俺がやってるのも、地下に置
かれたバックアップを取るためのサーバーからデータの修復作業を
している。

「喋ってないで手え動かせ。このままじゃ日が暮れても終わらん」
そう言ったのは工学部の三年生。一応先輩だけど、俺は自分より
弱い奴には敬意を払わない。逆に俺を崇めろって感じた。

「そう言えば、あの編入生って仁の知り合いなんだよな？」

「ああ、そうだけど？」

「強いのか？」

「そこそこ。魔法のセンスだったら愛華並だろうけど」

「姫城さんと同レベル？ それって天才じゃん」

ちなみに、愛華は魔法だけなら学院内トップクラスだ。

「姫城さん、可愛いよな……」

「手出しすんなよ」

「出さないって。俺だってまだ死にたくねえし」

賢明な判断だ。七十点くれてやる。

「でもさ、あの編入生ってディアマンテとなんかやりあってんだろ？」

「ああ、みたいだな」

「みたいって、知らないのか？」

「実際に見たわけじゃないからな。基本的に俺らからは関わらないし、向こうも基本的に俺らと関わろうとしないから情報なんて一切入ってこないし」

まあ、危なくなったら助けてやるうとは思ってるけど。一応幼馴染だし、愛華はあいつのことが好きみたいだから何かあったら愛華が無理しそうだし。

「ほら、無駄口叩いてないでさっさと作業しろ。明日になったら新しい機械来るんだから、急がないとまた作業増えるぞ」

『へーい』

その日、作業は夜の十時まで続いた。

「いい？ エルザさんの得意属性は火だから、弱点をつくなら断然水属性の魔法だよ。私の得意属性は水属性だから、いくらでも相談に乗るよ」

「メイジとの近接戦闘だったら俺が極意を教えてやる。なんだったら、完璧に意表をつく移動法とか、一瞬で背後を取る神羅木流武術でも」

「どんな相手と戦う時でも防御は忘れちゃ駄目。というわけで、二年の中で一番防御魔法の上手いあたしが魔法のクイック・シフトのやりかたを教えてあげる」

「……とりあえず、一人ずつ喋ってくれ。一緒に言われると何言ってるか分からなくなってくるから」

第一アリーナから寮に戻った後、すぐに愛華とそのルームメイト

で我がクラスの委員長、鬼灯灯までやってきた。

で、半ば強制的に莫座もくざの上に座らされ、今みたいに熱烈な指導を受けるに至るといっわけだ。

「それで、龍馬は重力魔法以外には何が使えるの？」

「単純な攻撃魔法だけだ。今のところはメガフレアぐらいだな」

まあ、まだ試してないだけで出来そうな魔法はいくつもあるけど。

「メガフレア？ 何属性の魔法？」

「闇属性。もしかしたら分類的には火属性になるかもしれないけど、火属性魔法の一覧にフレア系の魔法一つもなかったから別にいいかなって」

似たような魔法でイクスプロジアっていう魔法があったけど、あれは完全な火属性魔法だったし。

「そっか、龍馬の得意属性って闇魔法だったけね」

「闇属性って使える人全然いないんだよ。この学院でも星野君以外に闇属性の魔法使える人って二人しかいないんだから」

たしかこの学院って生徒と教師合わせて十万近くいたはずだよな？ それで俺含めて三人って、どんだけ少ないんだよ。

「ちなみに、一番多いのは火属性使いで約二万人ね」

「多っ！」

二万って、二割じゃんか。五人に一人は火属性が得意っていう計算になるぞ。

「じゃあ、まずは防御魔法からやる？ それとも攻撃魔法？」

委員長が爛々とした目で尋ねてくるけど、実際はどうしたらいいんだろうか。こういうときに一番頼りになるのは

「ん？」

やっぱり俺と戦闘スタイルが殆ど同じ大和だな。愛華はメイジで、近接戦闘は聞いても仕方ないし、委員長は聞くところによるとクレリックっぽいから俺とは合わない。

ちなみに、委員長の得意属性の光は、基本的に誰でも使えるけど光属性が自分の得意属性になることはそうそうないらしい。光属性

が得意な人は、この学院だと五十人程度しかいないらしいし。

「そうだな……エルザとやりあうとなると、やっぱり防御魔法の精度と質が問題になるな。まあ、今から精度と質なんて求めるだけ無駄だから、どれだけ強力なのが使えるか、そこが一番の分かれ目だな」

「強力な防御魔法か……うーん……」

空間転移を応用すれば防御は容易だけど、それだと法力が切れる可能性もあるし……悩みどころだ。

「だったら『絶対防御の盾』でも使う？」

そう言ったのは委員長。けど、簡単には賛同できない。

「そもそも俺は水属性ってあんまり得意じゃないからな。ちょっと試してみたけど、闇以外で一番しっくり来るのは雷属性だったし」

「え？ 星野君って全部の属性使えるの？」

「みんな普通に使えるんじゃないのか？」

大和は闇以外全部使えるって聞いたけど。

「神羅木君みたいに殆ど全部の属性を使える人ってそうそういないんだよ？ あたしは光と火しか使えないし、愛華だって水と風、それに光しか使えないんだから」

「普通だったら三つも使えれば良い方なの。大抵の人は自分の得意属性のほかに光だけ使えるとか、そういう人のほうが多いから」

「そうだったのか……」

まあ、仁やエルザみたいに一点特化型も多いわけだから、そう考えると大和みたいな万能タイプは逆に珍しいのかもしれない。

「魔法って奥が深いんだな……」

属性とか分類とか。法術だったら攻撃系か防御系かしか無かったから、覚えることはそれ以上だ。

「……………」

「どうした？ そんな昔植えつけられたトラウマを思い出した時みたいな顔して」

「あながち間違ってない」

法術を手に入れたときのことを思い出すと背筋に嫌なものが走るんだよ。

「とにかく、明日までに最低でも十個は覚えてもらうぞ。エルザ相手に魔法二つだけでやるなんて、馬鹿のやることだ」

「ご尤もだな」

今日は眠れなさそうだ。

その日、寝たのは結局夜中の二時半だった。

学年ランキング戦！

「眠い……」

ランキング戦当日の朝、俺は猛烈な睡魔に襲われていた。

習慣っていうのは恐ろしいもので、俺はこの学院に来る前は毎朝五時に起きていた。その生活が体に慣れてしまったため、朝の五時になると目が勝手に覚める。しかも、どういいうわけか二度寝が出来ないから起きるしかない。

「ふあああああ……」

「大丈夫か？」

ありえないくらい大きな欠伸が出て、隣で鰯のひらきを焼いていた大和が心配そうに声をかけてくる。大和も寝た時間は俺とそんなに変わらないはず（愛華と委員長は八時くらいに帰った）なのに、寝不足とかそんな様子は全く無い。前にどうしてか聞いてみたら、「戦場だと三日三晩寝れないことなんて珍しいことじゃないからな。ある程度訓練すれば、不眠不休で活動することだって出来るんだよ」と言ってた。お前はいつの時代からタイムスリップしてきたんだ。

なんか歴史系は自分の目で見てきたかのように詳しいし、倉庫になってる部屋には狩猟用のライフルとか、狙撃用のスプリングフィールドライフルとか、MP 40式のサブマシンガンとか、デザートイーグルまであった。一体何をしてるんだらうか。

「流石に睡眠時間二時間半はキツイな……」

「覚えること沢山あったしな。どうだ？ 少しはやれそうか？」

「勝てる気しかないつて。まったく、いろんなもの詰め込みやがつて……」

昨日だけで大和に無理矢理覚えさせられた魔法が十二個、愛華と委員長が教えてくれた防御魔法が七個。計十九個。一気に戦いのレパートリーが増えた。

そのことには感謝するけど、大和が途中から教え出した神羅木流武術（大和が自分で考案して作った我流の武術）は、はつきり言って余計だったんじゃないだろうか。もう武術なんてくさるほど習ったし、今更教えてもらおう必要なんてなかったんだけど、

「大丈夫だって！ 絶対に役に立つから！」

って強く押されて、仕方なく聞いてたんだけどやっぱり時間の無駄だった。

「で？ 新しい闇魔法は考えついたのか？」

「一応な」

グラビティ・コア、メガフレアに続く闇魔法となると、やっぱり威力重視型になる。ただ、グラビティ・コアは中距離型、メガフレアは遠距離型だから、今度は近距離技が良いと思って考えてたんだけど、闇属性ってかなりピーキーっぽくて、近距離系に転化できないことが分かった。出来ないことも無いのかもしれないけど、今のところは超大威力の中、遠距離魔法としてしか使い道は無さそうだ。ただ、俺が考えついた闇魔法は下手したら他の人にも危害が及ぶ可能性があるんだよな。なんて言ったって、超大威力の遠距離攻撃魔法だし。

「大丈夫だろ。ランキング戦のとき、観客席には『絶対防御の盾』ミストラル・シールド並の魔法障壁が張られるからな。仁の究極魔法でも壊れないんだから心配すること無いって」

「ああ、じゃあ安心だ」

仁の究極魔法は見たことが無いけど、多分昨日の『凍る世界の断頭台』ドラスより少し強いくらいだろう。それなら安心だ。

「ほら、焼きあがったぞ」

「こっちも炊けたな」

朝食が出来上がったから、それを持って囲炉裏いろりの側に向かう。この時期になって囲炉裏はどうかと思っただけど、梅雨は意外と冷えるから丁度良いのかもしれない。

今日の天気は朝からどんよりとした曇り。降水確率は80%で、

最低気温は8度と、三月の上旬並だ。当然、囲炉裏の焚たかれて
室内より外のほうが断然寒い。こりゃ、今日も衣替えは出来そうに
無いな。

葉盟学院は特に衣替えについて明確な時期は決まっていけない。と
いうのも、ロシアみたいに寒い地方から来て寒さに慣れてる人や、
インドネシアみたいな熱帯地域から来て暑さに慣れてる人や、宗教
上の理由で肌を晒ひせない人などもいるからだ。

サマーセーターというのものもあるけど、葉盟学院のワイシャツは真
っ黒だから、サマーセーターは白色指定になっている。俺的には黒
か紺のやつが良かったんだけど、編入前の説明会で質問したら駄目
だって言われた。制服の改造はいいのに、色違いを着るのは駄目な
のか。大和なんていつも呉服だぞ。

まあ、それはともかく、今日の朝食は殆どいつもと変わらない。
御飯に豆腐とワカメの味噌汁、鰯のひらきと白菜の漬物、それに、
大和が大好物だという温泉卵。バランスはそこそこ取れている。俺
的にはもう少し野菜が欲しいところだけど、そのへんはそのうち二
人で話し合っていこう。大和も野菜は好きみたいだし。

ちなみに、仁は全くと言って良いほど野菜を食わない。その代わ
り、あいつの部屋の冷蔵庫には「一日分の野菜」の紙パックが大量
に入ってるらしいけど。

「憂鬱ゆううつだな……」

「そうか？」

突然大和が沈んだ声を出したからなんとなくそう聞いてみたけど、
すぐに理由が分かった。

大和は学年二位っていう立場上、強制参加のランキング戦だと必
ず仁とやりあうことになる。昨日聞いた話だと、愛華はたまにエル
ザとの対戦カードが決まるらしいけど、その度にエルザがいなくな
るからランキングの変動が無いらしい。ランクの低いほうが高いほ
うに負けるのは仕方ないってことなんだろう。

その代わり、ランクの低いほうが高いほうに勝った場合はランク

が丸ごと入れ替わるらしい。だから、今日の試合で俺がエルザに勝つたら、俺が学年四位でエルザが学年最下位になる。かなりリスクはあるはずなのに、エルザはどうして俺との勝負を熱望したんだろうか。未だに謎は深まるばかりだ。

「まあ、今日のランキング戦も無事に終わるとは思えないけどな」

「は？」

「いや、こつちの話」

おかしな奴だ。

「そんじゃ、行くか」

さつさと食べ終わった大和が自分の食器を流しに持っていく。いつも思うけど、大和は食べるのが早すぎじゃないだろうか。昨日聞いたら、

「戦場だと落ち着いて飯を食ってる時間なんて殆ど無いからな。食うスピードは出来るだけ迅速に素早く。それが、戦場で生き残るコツだ」

と言っていた。お前はいつの時代の軍人だ。

ちなみに後で知った話だが、大和の家は昔から女性が家を継ぎ、男性は軍人になるっていうしきたりがあるらしい。それで、軍人である父や祖父からそういつた教育（という名の修行）を受けているうちに、今みたいな性格に育ったらしい。大和も将来の夢は、魔法世界での軍隊である魔導騎士団に入ることらしい。

俺も残っていた味噌汁を胃に流し込み、食器を持って流しへと向かう。普段はちゃんと片付けてから登校するんだけど、ランキング戦の日にそんなことをしたら事前の魔法訓練が出来ないから、ランキング戦に出る生徒はみんな朝の六時にはアリーナにいる。

今日の大和の格好はいつもみたいな呉服姿ではなく、きちんと制服を着用している。理由は、戦うって分かっているのに着物なんて着てたら傷物になるかららしい。別に魔法に対する耐性を上げるためではないみたいだから、大和の自信と強さが窺える。

「日本刀とか持っていなくて良いのか？」

「ああ、忘れてた」

部屋を出る直前に大和にそう言われ、慌てて中に引き返す。俺の刀は、相手の特徴と得意距離によって長さを変えられるから、かなり便利だ。

「準備完了つと。大和はいいのか？」

「俺はアーティファクトだけあれば事足りるからな。別に仁に勝とうと思ってるわけでもないしな」

「そっか。んじゃ行くか」

俺は日本刀二本を腰に差し、大きなリュックと太刀一本を背負って部屋を出た。

「なんか……すごいな……」

第一アリーナには既に多くの人がいた。開館時間は朝の八時からだけど、会館と同時に良い席を取りたいと思う人が多いのか、入り口の前には長蛇の列が出来ている。こんな天気の良い日にわざわざ並ばなくても良いと思うけど、これはこれで事情が違う。

ランキング戦ってというのは、生徒のランクを決めるほかにいろいろの意味がある。例えば、大学院に常駐している魔導騎士団が新しくスカウトする生徒を見繕うことだったり、学院内で商売をしている生徒がここぞとばかりに稼げる機会でもある。実際、屋台みたいなのもいくつか出ている。

ついでに魔法世界（俺らが暮らしている現行世界と同じ座標で同じ位している並行世界のこと）からは、評議会のお偉いさん方が数人来て、有能な魔導師をスカウトしてたりもする。実際、愛華や大和もスカウトされたらしいけど、よくは知らない。

アリーナの中にも、結構多くの人がいた。メインフロアでは当然のように生徒が魔法を使っていて、各々の好きなようにやっている。観客席には複数の教師が配置され、それぞれが魔法障壁を張った

り危険物が無いか等をチェックしている。特に魔法障壁については入念で、仁の『凍る世界の断頭台』や俺のメガフレアとかは普通の魔法障壁じゃ防ぐことが不可能なほどの威力を持っている。だから教師総出で『絶対防御の盾』並の障壁を張らないといけないわけだ。「ランキング戦のときは観客席が全部埋まるぐらい人が来るからな前は、生徒なんてなんとしても授業を抜け出そうとしてたから、いっそのことランキング戦のある日は学院内の授業全部休みにしようってことで、祝日みたくなるんだよ」

「でも魔法の実習丸潰れだろ？ 単位足りるのか？」

「いや、そもそも魔法の授業って四単位しかないんだよ。金曜の実習は、言わば自分で好きなことが出来る時間だからな」

「そうなのか」

金曜は魔法の授業のほかに、単位が足りてない科目の補習とかもやるみたいだから別に問題は無いのかもかもしれない。

メインフロアでは、仁が派手な魔法を派手にぶっ放していた。フロアの表面には厚く氷が張られ、ちよつとしたスケートリンクと化している。魔法の練習をしているのが八割、スケートして遊んでる生徒が一割、何もせずにボーっと突っ立ってるのが一割。っていうか、立っただまま寝てる？

「朝も早いしな。この状況下で寝る奴がいても不思議なことじゃねえよ」

「そんなもんなのか？」

間違いなく寝たら死ぬと思うんだけど。

ちなみに、雪山で遭難した時に寝たら死ぬっていうのは、人間は睡眠時に体温が少し下がる。で、起きるまで体温は上がらずに下がり続ける一方だから、氷点下の雪山で寝たら凍え死ぬって事。雪山に行く時は、最低でも毛布一枚は必須だ。

「そしたら救護班メデイックが運ぶから大丈夫だって。心配いらん」

「救護班、ね……」

俺が世話になることはあまりなさそうだな。基本的に怪我なんて

しないし。

「じゃあ俺らも最終調整でもするか」

「そつだな」

俺は腰の鞘から日本刀を一本抜くと、同じように背中に背負っていたリユックから砥石とじしと水を取り出す。普段はあんまり研ぐ必要は無いんだけど、今回はちよつと真剣にやらないとやばそうだから念入りに。

「そう言えばさ、エルザってメイジじゃん？俺もハンデ背負わないといけないのか？」

俺は分類的にはファイターらしいから、メイジとやる場合にはハンデとして制服の着用が禁止になるかもしれないんだけど、そこんところはどうなんだろうか。

「別にいいんじゃないか？今のお前って学年最下位だから、逆にお前がより有利になるハンデでも付けられるかもしれないしな」

「そつか……うーん……」

「不満か？」

「なんか、俺の実力を正しく評価されてないのがかなり不満だ」

これは昨日寝る前に大和が言ってたことだけど、大和や愛華が教えてくれた魔法が全部完璧に使えるなら、俺の実力は大和と同レベルかそれ以上だ。しかも超強力な遠距離攻撃魔法まで使えるから、場合によっては魔法だけなら学院一の実力はあるかもしれない。

さすがに仁には勝てないかもしれないが、戦いのセンスだけなら仁以上だと確信してる。ただ足りないのは、単純に戦いの経験だ。

仁は葉盟学院に編入当初から血の気が多く、強い奴にも平気で負ける勝負を挑んでいたらしい。その結果として物凄いぐらいの経験が溜まり、学院最強って言う不動の地位を築くまでに至った。

俺も海斗みたいな化け物との戦闘経験は豊富だけど、あいつの場合俺が向かっても軽くあしらうような感じだったから、結果としてはそこまで俺の経験にはならなかった。

「だったら胴着でも貸してやろうか？」

「あるのか？」

あるんだつたら是非貸してほしい。制服って動きやすいように意外と動きにくいんだよ。伸びないし。

「合気道部の道場に行けば俺の胴着があるからな。第三アリーナだからここからは往復で三十分ぐらいだし」

大和の胴着だったらそこまでサイズは変わらないだろう。俺との身長差も七センチしかないし、大和は腕が長いから俺と殆ど同じの身
ず。

「それに、俺も一応胴着でやるつもりだったし」

「なんで？」

「制服に扇子つてあんまり合わないだろ？ だからだよ」

うわ、すっげー安直な理由。ハンデが要らないからとかそういう意味じゃないんだ。

「じゃあ取ってくるわ。袴はかまでいいだろ？」

「ああ。頼む」

俺がそう言うと、大和は関係者用の入り口から外に出て行った。

『対戦表が決まりました。生徒の皆さんは確認してください』

大和が出て行ったのとほぼ同時に、頭の中にそう声が響いてきた。発信源はアーティファクトのカードで、前聞いた通信機能ってやつだろう。

俺は昨日愛華に聞いたのと同じ手順で対戦表を表示させ、数秒後に言葉を失った。

第一試合は俺とエルザの試合だった。

「逃げずに来たんですね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも」

第一試合の開始時間になって更衣室からメインフロアに出ると、大勢の観客の歓声と熱気に包まれた。観客席は満員御礼。学院中か

ら生徒や教師、それに関係者が集まってくるだけあって、みんなテンションが異様に高い。

さつき大和は胴着を持ってきてくれると言っていたが、肝心の大和は途中で先生に捕まって何かをやらされてるみたいだからここにはいない。だから俺の服装は初期装備の制服状態だ。

『それでは、本日の属性フィールドを発表します！』

属性フィールドというのは、文字通りフィールドの状況を八つの属性の中から抽選で決めるというもの。たとえば、火属性だったら燃え盛る炎の中とか、水属性だったらプールの上に足場が少しだけとか、そういうのがある。

今までの傾向としては水と土が同じぐらい多いらしい。土はフロアに岩を置いただけの単純なフィールドになるから、属性フィールドの中では一番戦いやすいと評判だ。

『本日の属性フィールドは！……………え？』

さつきまでのノリノリなテンションとは大きく変わり、突然司会者の声が困惑一色に染まった。何かあったのだろうか。

天井付近に設置された超大型スピーカーからは複数の人の声が聞こえるけど、何を言ってるかまでは分からない。

『えー、失礼しました。本日の属性フィールドを発表します』

さつきの人とは声が変わったから人が変わったんだろう。

『本日の属性は 闇です』

その瞬間、アリーナが驚愕びっくりの声で揺れた。

（闇だと何かあるのか？）

俺はアーティファクトの通信機能を使って愛華に話しかける。すると、愛華はほんの数秒で返事をしてきた。

（分かんない。今まで属性が闇になったことなんてなかったから……）

むう、あんまり聞く意味なかったな。まあ、仕方ないんだろうけど。教科書にも属性フィールドについての説明は闇属性以外しか書かれてなかったし。

『それでは、フィールドを展開します』

司会の人がそう言った途端、フロアに黒い霧もやが充満し始めた。これが閻属性のフィールドなんだろうか。ん？

(空間が歪んでる?)

感覚を研ぎ澄まさないと分からないレベルだけど、確かにアリーナのどこかの空間が歪んでる。もう少し規模が大きければ場所の特定も出来るんだろうけど、この黒い霧のせいで正確な位置がまったく掴めない。

(ま、この程度なら大したことにはならないだろ)

もう少し規模が大きいならこんな試合は放り出して空間の修復をしないといけないんだけど、今ぐらいの歪みだったら結構日常的に発生するし、大したことではない。

「……………ですから、わたくしは負けるわけにはいかないのです！」
「ん？」

いろいろと考え事をしてたせいでエルザが何か一人で言ってるのに全く気付かなかった。丁度話が終わったみたいだけど、最後の一文しか聞いてなかった俺にとっては、エルザがどうしてあんなに自信満々の笑みを浮かべて人差し指を突きつけているのが全く分からない。何か大事な話をしてたならゴメン。聞いてなかった。

『それでは、学年ランキング戦、高等部二年の第一試合、学年四位、エルザⅡFⅡディアマンテVS学年最下位、星野龍馬の試合を開始します！』

開始のブザーがアリーナに鳴り響き、それが切れると同時にエルザが動いた。

すでにアーティファクトは召喚され、魔法を使う準備は整ってるみたいだ。

「速攻で決めますわ！」 『グラン・フェリア灼け尽く劫火』！」

エルザは俺の予想と寸分違わぬ魔法を使ってきた。けど、

「その魔法は一回見た」

俺は刀を一本引き抜くと、常人の目にも留まらぬ速度で炎を斬り

落とした。それと同時に無数の斬撃が発生し、残った炎を散り散りに霧散させた。

今のは俺の長年の修行で手に入れた技、剣技『縮光』ちゆうこうだ。鋭い刃物で空間を高速で斬り裂き、空と空の間に溝を作ること、その溝に空気が入り込む時に発生するソニックウェーブを利用して対象を切り刻む技。見た目は一回だけ斬ったようにしか見えないが、その実、攻撃回数は驚異の三十二連撃。それを俺は一秒間で七閃連続で出来る。

つまり、俺は一秒間に最大224連撃まで出来るということだ。
「なっ！」

エルザはまさか自分の魔法が切り落とされるとは思ってなかったように、勢いよく跳躍をして俺から距離を取る。まあ、それも仕方ないことだけだ。

エルザが使った『灼け尽く劫火』グリン・フェリアは、火属性の高級魔法でかなりの威力を誇る。威力的には同じ火属性魔法のイクスプロジアとかのほうが全然上なんだけど、『灼け尽く劫火』は攻撃範囲が滅茶苦茶広い。俺のメガフレアには遠く及ばないものの、仁の『凍る世界の断頭台』フェドラスよりは遥かに広い攻撃範囲を持っている。

以前に教室で使った時はかなり力を制御してたっぴいから、今回は前回とは比べ物にならないサイズだったけど、所詮はただの炎俺に通用するようなものじゃない。

「でしたらこれはどうですの!? イクスプロジア！」

エルザがそう叫ぶと同時に、俺の周囲に小さなスーパーボール大の炎の球が無数に浮かび上がる。その中の一つが隣り合ったものと触れると同時に爆発を起こし、残ったものも連鎖爆発して俺の体は爆炎に包まれた。

「これならさすがに」

「流石だよ。流石学年四位」

「っ!?」

エルザは言葉にもならない叫び声をあげる。当然だろう。目の前

で爆発に巻き込まれた人間が突然背後に現れたら。

俺が使ったのは何の仕掛けもない、ただ単に早く動いた。それだけのこと。

まあ、爆炎にまぎれるようにエルザの死角に移動し、気付かれなように足音も立てず、迅速に行動したらああなっただけなんだけど。

(なんか……呆気ないな……)

もう少しやれるものだと思って試してみたんだけど、とんだ見込み違いだ。メイジは懐に入られたら間違いないく負けが確定するっていうのに。

俺は刀をエルザの首に当てて言う。

「これで一回死亡な」

「……馬鹿にしていますの？」

「そういう風を感じるならそうなんじゃない？」

まあ、今のは完璧に馬鹿にするつもりで言ったんだけど。

「そもそも、俺はまだアーティファクトすら出してないんだ。こんな中途半端な感じで終わらせたら後味悪いだろ？」

実のところ、俺はアーティファクトを使う気なんてこれっぽっちもない。そもそも使い方がよく分からないし、戦ってる最中に本に何かを書き込んで暇なんてない。それよりも、俺は近接戦闘型なんだから補助武器を使って戦うより、武器を持ってそれを振り回すほうが性に合ってる。

賤刀『珀^{せんとう}風^{はくなぎ}』はまだ出してないし、魔法も使っていないし、法術すらも使っていないのにこの体たらくじゃ先は見えたようなものだけど。(唯一の不安はさつきから感じてる空間の歪みくらいか……)

歪み自体は大した規模ではないが、それでもゆっくりと確実に大きくなっている。まるで、何かの外的要因を感知して自動的に肥大化するプログラムが組み込まれているみたいだ。その場合はかなり深刻な状況に発展しかねない。

空間の歪みが発生したのは、丁度アリーナの属性が無から闇に変

わった瞬間だ。属性を変えるのにはかなり大掛かりな魔力の干渉が起きるらしいから、その感応現象で空間に異常が発生した可能性もゼロではない。ただ気になるのは、メインフロアに充滿しているこの黒い靄が、まるで何かを吸い取ってるように感じることぐらいか。(でも一体何を……?)

エルザが魔法を使った時には何も異変はなかった。つまり、魔力を吸収してるわけではないらしい。ただ単に視覚を極端に悪くすることがこのフィールドの特性なのかもしれないけど、それだけとはどうしても思えない。

けど、特に行動が阻害されてるわけでも、魔力の精製が上手く出来ないわけではない。ただ単に、視界が極端に悪いだけ。

(ま、考えるだけ無駄か)

それよりも今は目先のこと集中　おや？

意識を戻すと、腕の中からエルザは消えていた。はて、どこに行ったのやら。

視界がかなり悪いからどこいるかが全く分からない。一寸先は闇つてこういうことをいうんだろうか。実際は五メートルぐらい先は見えるけど。

(そろそろ真面目にやるか……)

「三式魔法陣展開」

このままだと退屈な展開にしかないから、いつそのこと自分から打ち壊してみようと思う。昨日大和に教えてもらった攻撃魔法シリーズ第一弾、風属性魔法の雛罌粟ひなげし(大和のオリジナル)を使ってみようと思い、それを使うのに俺は魔法陣を展開した。

「舞うは花、紡ぐは風。風は花を散らし、花はその棘をもって傷をつける。」

傷は朱の血を流し、血は白を朱に染める。

吹けよ風。舞えよ花。その棘をもって朱に染まる傷をつくれ」

これは大和が自作した魔法のため、詠唱を短縮する効果のある魔法陣を使っても一番短くてこのぐらいの詠唱になる。

長つたらしい詠唱をしても、俺が使ったのは「かまいたち」という、人の力でもやろうと思えば出来る程度の魔法だ。ただ、人の手でやった場合は人を殺せるほどの殺傷力を得ることは出来ない。せいぜい薄皮を切る程度だろう。

そこに闇の魔力が加わると、それだけで十分に人を殺せるほどの威力が得られる。

闇の魔力の特性は、圧倒的な破壊力。例えば、火属性で最弱の下級魔法、ファイアでさえ闇の魔力が加わるとイクスプロジア並みの破壊力が引き出される。

じゃあ、大和の自作した中級魔法に匹敵する威力を持つ「離墜粟」なら？

「切り刻め」

魔法自体に攻撃の意思を伝えると、メインフロアに斬撃の嵐が発生した。斬撃はフロアを抉り、壁を削り、魔法障壁を凄まじいスピードで砕いていく。流石にこの学院の教師が作った魔法障壁だけあって頑丈だけど、いつまでも持つものじゃない。

数秒の後、鎌鼬はゆっくりと消えた。

「おっ、発見」

俺の立っていた場所から右斜め前方三十メートルほどのところで、エルザは膝をついていた。服はボロボロだが、どうやら怪我はないみたいだ。

「わたくしは……この程度ではやられませんわ……」

「ご立派だな。でも、その威勢のよさもいつまで」

そう言つて、気付いた。

（なんだ……？ 凄まじい勢いで空間の歪みが拡大してる……？）

さっきまでは握りこぶしほどの大きさだった空間の歪みが、今は人の身長と殆ど同じ大きさに拡大している。

（まさか、空間が歪んでるポイントって）

「余所見とは余裕ですわね！」

「っ！ 馬鹿！ こっち来るな！」

俺の推測が正しければ、空間が歪んでるポイントは間違いなくその瞬間、空間に大きな穴が開いた。

穴はどんどん肥大化し、とうとう十メートルを越えるほどになった。

「な、なんですか？」

危機感に乏しいエルザが間抜けな声を出す。だが俺にはそんなのに構ってる暇はない。

このままだと、空間から切り離された場所に存在する歪曲空間わじきょくからとんでもなく厄介なものが出てくる。そうになったら、いくら俺でも抑えることは不可能だ。

「逃げる！ もう持たない！」

「一体何ですか……？」

ああもう本当に危機感に乏しい女だな！ 観客席見たら分かるだろ！ もうみんな逃げ出してるとんだって！

本当はそう言いたいけど、そんな余裕はない。どうやら

「時間切れ……か……」

不意に口からそんな言葉が出た。

それと同時に、空間の穴が一層大きく開いた。

『緊急事態！ 緊急事態！ メインフロアにて大規模な召喚魔法陣が展開中！ 繰り返し！ メインフロアにて大規模な召喚魔法陣が展開中！ 生徒は速やかに屋外へ退避！ 教員は警戒態勢をレベルEへ！』

ようやくというか、アリーナに複数設置されたスピーカーから避難と警戒態勢を取る指示の音が聞こえてきた。しかもレベルE。

世界共通のことだが、危険度というのはAからEまでの五段階で示される。Aは普通の状態、特に何も起こっていない状態。Bは盗難とか傷害事件とか、その程度。Cで一気に上がって、テロリストが銃器を持って暴動を起こしたとかそういうもの。Dはさらにランクが上がって、まあ、ゴジラが日本上陸したと思ってもらえれば良い。

で、レベルEが最高で、世界で核戦争が起きたとか、地球に存在する生命体の七割以上が確実に死に至るサイズの隕石が落ちてくるとか、そういう話だ。

葉盟学院は世間に知られていない魔法学校（国自体はこのことを知ってるらしい）で、その教育課程で危険度がレベルC、Dになることはざらにある。実際、去年に仁が本気でキレた時はレベルDまで行ったらしいし。

だけど、レベルEは異常だ。そしてそれは一つの事実を物語っている。

簡単に集束できるような事態じゃないって事。

「龍馬！」

空間の歪みを見てみると、遠くのほうから仁と大和が走ってくるのが見えた。黒い靄はどこかに消えたため、今では遠くの様子まではつきりと見える。

「第一種警戒態勢だ。生徒は今すぐ屋外に避難、この事態は教師が

」

「いや、無理だろ」

近くまで来て避難を促してくれる大和には悪いけど、この状況は教員程度じゃどうしようもない。

そう思ったのと同時に、黒く歪なモノが空間を抉じ開けるようにしてその姿を現した。

高さは約十二メートル。足は無く、頭も無い。明らかな意思を持って行動してるから生き物だというのは分かるが、現行世界には確実に存在しないモノだ。

だが、俺にはその生き物に見覚えがあった。

（サクリファイス……）

腹の辺りで途切れた体に、体積の半分以上を占める巨大な二本の腕。そして、両肩の中間辺りに、とても大きく、不気味な目玉が付いている。

「なんだ……コイツ……」

「歪曲空間の主、サクリファイスだ」

仁が発した言葉を俺は何の気なしに返す。

歪曲空間という名前に聞き覚えがある人は殆どいないだろう。俺らが暮らしている現行世界リアル・ワールドと魔法世界があるっていう並行世界パラレル・ワールド。その空間の狭間にあつて、空間と空間の境目に出来る抜けわじれによって発生した空間。それが歪曲空間だ。

だが、そこには本来どうやっても繋がることは無い。俺の空間制御を使えば繋がらないことも無いけど、成功率は限りなくゼロに近い。それほどに、現行世界からも並行世界からも隔離かくりされた空間なのだ。

「オオオオオオン……………」

サクリファイスが泣いている。だが、それは悲しいからじゃない。

歪曲空間から出れたのが嬉しくて嬉しくて堪らないからだ。

「大和」

「どうした？」

「俺が合図したら全力で横に飛んでくれ。出来ればエルザも連れて」
「分かった」

あと何秒時間があるか分からないけど、こうなったらもうやるしかない。

「今だ！」

俺がそう叫ぶと同時に、サクリファイスの巨大な目から光線が放たれた。

「絶対防御の盾！」

昨日委員長に教えてもらった防御魔法の瞬間発動で水属性最強の防御魔法、絶対防御の盾を発動させる。理論上はどんな攻撃でも完璧に防ぐはずだから、このまま前方に出していれば何も問題はない。そう思っていた。

「ぐうっ！」

光線が盾に当たった瞬間、物凄い衝撃が盾を貫いて俺の体に襲い掛かってきた。光線自体は盾によって防がれてはいるものの、サクリファイスの目から連続して射出される光線は一向に途切れる気配がなく、俺の体はじりじりと後ろに押されていった。

（マズイ！ このままじゃ防ぎきれない！）

防御した攻撃を全て魔力に変換すると言う追加効果があっても、そんなのを全て帳消しにしてしまうような程に強烈なサクリファイスの光線は、ついに絶対防御の盾を一部削り取るほどになってきている。

こつなつたら、まだ試したことはないが奥の手を使うしかない。

閻属性の魔力の特性は圧倒的な破壊力だが、それ以外にももう一つある。それは、魔法の効果そのものを書き換えること。魔法そのものを構成しているプログラムに追加作用のあるプログラムを書き足すようなものだと思ってもらえればいい。

例えば、さつきエルザが使った『灼け尽く劫火』は灼熱の炎が襲ってくると言う単純なものだったが、それに『着弾の瞬間に爆発を起こす』という動作を加えることが出来る。

その特性を生かして、俺は一瞬で絶対防御の盾にある動作を加えた。

それは、魔力に変換されるはずのダメージを変換せずに、攻撃を受けた面に向かって射出。攻撃そのものを鏡のように反射する。

「吹き飛ばす！」

絶対防御の盾がサクリファイスの光線を押し返すように反撃を開始する。俺の腕には光線をまともに食らうよりも大きな衝撃が伝わってくるけど、盾に溜まった魔力のおかげで光線はどんどん押し返されていった。

だが、もう少しでサクリファイスに届くと思った瞬間、向こうの放っている光線とこつちが射出している光線の間で大きな爆発が起こった。

爆発により発生した衝撃波に押されて、体ごと観客席のほうに弾

き飛ばされる。だが、咄嗟に使った空間制御で衝撃を軽減したためそこまでダメージは大きくない。

雛罌粟のせいで脆くなっていた魔法障壁は、俺がぶつかった衝撃で一部崩れたが、脆くなっていたのはその一部だけだったようで他の部分に影響は無さそうだ。

「仁！ 大和！ 大丈夫か！」

「ああ！ こっちは大丈夫だ！」

急いで仁と大和の安否を確認すると、大和からは返事が返ってきた。

向こうは無事みたいだけど、仁のほうから返事が無い。確か、仁が飛ばされたのは更衣室のほうだったはずだけど……。

だが、仁の返事は俺も予想外のものだった。

「『凍る世界の断頭台』！」

氷の粒子によって形成された大斧がサクリファイスの頭上に召喚される。そして、それは一度上がったかと思うと、勢いよくサクリファイス目掛けて振り下ろされた。

「碎け散れや！」

仁がそう叫ぶのと同時に、氷の斧がサクリファイスに命中した。

ズズウウウン！！ という音を立てて斧はフロアに突き刺さり、真っ白な粉塵がアリーナに充満した。

「雑魚が粹がつてんじゃねえぞ！」

全く、本当に怒らしたら怖い奴だ。サクリファイスは動きが遅いから普通に当たったんだらうけど。

「ま、所詮俺に勝てる奴なんて」

そこまで言って、突然仁が黙った。

いや、黙ったわけじゃない。

「じぶっ」

仁の口から鮮血が溢れる。そして、それは口からだけではない。

腹。仁の腹から、硬質な一本の指が生えていた。

「仁ー！」

ドサツ、という音を立てて仁が前のめりに倒れる。そして、仁の倒れた場所に真っ赤な血の海が広がった。

(くそっ！ やっぱり空間転移が使えるか！)

始めに抱いていた不安は見事に的中し、サクリファイスは俺と同じ空間転移の能力が使える。流石に空間制御までは使えないとは思うけど、万が一の場合を考えて早めに倒した方が良い。

俺は異次元から賤刀『珀風』を引っ張り出し、サクリファイスに特攻をかける。

(剣技)

「縮光！」

右腕を狙い、目では追えないほどのスピードで剣を振るう。だが、珀風はサクリファイスの硬質な殻に弾かれ、俺の体は俺が狙った腕とは逆の腕で弾き飛ばされた。

「くそ…… やっぱり剣じゃ無理か……」

だったら、まだ実験もしてないけどやるしかない。

俺は珀風を異次元に戻し、腰から一本のカートリッジを取り出す。出来るかどうか分からないけど、やらないよりはマシだ。

「ロストフレード消失する刃」！

そう叫ぶと同時に、カートリッジの先から漆黒の刃が伸びた。

「おっしや成功！」

『消失する刃』。空間転移の派生技として考えていた防御不可能の剣。これを振るうと空間に次元断層が発生して、その場にあるものはたとえ世界最硬の超金属、NWS超硬合金でさえも真っ二つに割れる。

だが、サクリファイスもそれを黙って見過ごすわけにはいかないみたいだ。

一度完全に動きを止めると、体中に幾百、幾千とついた小さな目玉が一気に開眼した。

「やばっ」

反射的に距離を取ろうとした瞬間、サクリファイスの全ての目玉

から光線が発射された。三六〇度全方位の広角射撃でアリーナが爆風に包まれる。咄嗟に展開した『絶対防御の盾』で攻撃は防いだけど、それでもダメージが全く無いわけじゃない。

「大和！」

「分かってる！」

俺が大和に合図を出すより前に、大和はサクリファイスに奇襲を仕掛けていた。その手にはアーティファクト、風雲扇が握られている。

「舞え！ 雛罌粟ひなばな！」

大和が風雲扇を振るうと同時にサクリファイスに向けて鎌鼬が発生する。だが、やはりその硬質な殻に阻まれ、まともなダメージは与えられていない。

「わたくしがいるのを忘れてもらっては困りますわ！」

エルザもサクリファイスに向かって奇襲をかけるが、一際大きな目玉がエルザの姿を捉えたのが遠目に見えた。

「馬鹿野郎！ 死ぬ気か！」

「えっ？」

俺の声に反応してエルザの動きが一瞬止まる。それとほぼ同時に、サクリファイスが長くて堅牢な腕を振り上げた。

「くそっ！ 間に合え！」

全力の法術強化で法力を足に集中させ、エルザとサクリファイスの間に割り込みエルザを突き飛ばす。そのままだと大した距離も移動しないから、地面に触れる物の摩擦係数を空間制御で減らして滑りやすくする。そうすれば、素肌が地面に接触しても大したダメージは残らない。緊急事態とは言え、女の子をキズモノにするのは気が引けるし。

だが、エルザを突き飛ばしたのとほぼ同時に俺の左肩に物凄いぐらいの衝撃が襲いかかった。

そして左肩に目を向けた瞬間、俺の意識は現実と切り離されそうになった。

サクリファイスの硬質で鋭い爪が俺の左腕をこつそりと抉っていた。

「ぐっ！」

痛みを知覚した途端、強烈な激痛と猛烈な吐き気がこみ上げてきた。

マズイ。この凄い力で抉られたせいで左肩と鎖骨、肋骨の左側がほとんど碎けてる。下手したら脊椎にまで損傷がありそうだけど、こんな状態じゃ泣き言も言つてられない。

サクリファイスの爪には俺の腕がぶら下がっていて、一見すると布切れのように見えるけどそれは俺の血で赤黒く染まっていた。

「ど……どうして……」

「……あ？」

「どうしてわたくしを助けたんですの……？ そんな……大怪我までして……」

「……、……馬鹿か、お前」

即行でズボンのベルトを外して肩口を強く縛って止血を行い、傷口を法術で固定する。空間制御はうまく使えばこういうことも出来る。出血を止めるのなんて造作もないし、細菌が入るのも防げる。

まだ傷はかなり痛むが、すぐに発動させた光属性魔法の『リジエネ』のおかげで少しずつだが痛みは引いてきている。この程度、昔海斗に焼き殺されそうになった時に比べたら全然天国だ。あいつの場合、殺さないように低温でじっくりと焼くような陰湿な真似を平気でするし。

それに、エルザを助けた理由は至極単純だ。

「……弱い者を助けるのが、主人公ヒーローだろ？」

何の気なしにそう軽口を叩くが、実際は余裕なんてこれっぽっちもない。俺の攻撃の殆どはサクリファイスの硬質な殻に防がれるし、効きそうな攻撃は出す前に潰される。

俺の使える攻撃魔法は超広範囲の殲滅系だから、今の状況で使えば周囲への被害は免れられない。観客の避難も完全には終わってないし、魔法障壁はさっきのサクリファイスの全方位攻撃で完全に消滅している。こっちに支援として入ろうとしていた教師陣も、今は攻撃が観客のほうに通らないようにするだけで手一杯という感じだ。しかも、今の俺の状態だと接近戦は不可能だ。動こうとするだけで体中に激痛が走るし、正直言ってさっきから呼吸もまともに出てない。幸い臓器に影響は無かったけど、このままじゃ死ぬのを覚悟しないと。

（万事休すか……）

あまりにも絶望的な状況に、俺の意識レベルも低下して周囲の風景が歪む。

サクリファイスが勝ち誇ったような雄叫びを上げたのと同時に、俺の意識は闇の中にひきずり込まれた。

「ここは……」

目を覚ますと、そこは真っ白な光だけが充満した、どこか懐かしいような不思議な感じのする空間だった。周りには何もなく俺以外の誰もいない。いや、ただ一つ、背後に一本の巨大な木が立っていた。

見るからに五十メートルは軽く超えるような、現実では考えられないほどに高く伸びた、新緑の葉が生い茂った一本の古木。だが、俺はそれに見覚えがあった。

学院の校舎から見える超巨大な魔力の結晶体である《世界樹》に酷似している。だが、あの樹とは大きさが違う。学院の土地のど真ん中に生えている世界樹は、どこからどうみても百五十メートルを超えているからだ。

この学院に来てまず最初に驚いたのはそれだった。生物学的に考

えても植物学的に考えても、どういふ風に考えてもありえないほど巨大な一本の木に、俺の心は奪われた。出来ればサンプルを取って調べたいと思っただけ、編入の初日からいろいろなことがありすぎて後回しにしていたんだっけか。

そんなことを考えていると、突如として一陣のつむじ風が吹き、風は床に溜まっていた何かを撒き散らした。

咄嗟に目を瞑って右腕を前に出す。そんな風も数秒もするとゆっくりと収まった。

「何なんだ、一体……」

そうぼやきながら目を開けると、目の前に俺が立っていた。……は？

「こんなところでくたばって良いのか？」

俺の目の前にいる俺

俺は俺に向けてそう訊ねる。って、これだと分かりにくいな。よし、目の前に立つ俺を『もう一人の俺』と呼称するようにしよう。

「お前のために泣いてる女の子がいるだろ」

そう言ってもう一人の俺は何もない空間を指差す。すると、その空間に何かの映像が浮かび上がった。

「あれは……！」

そこには、俺の頭を抱えながら大泣きしている愛華の姿が映し出されていた。

その後ろでは教師陣がサクリファイスの進行を止めようと必死になっている。よく見ると、大和や委員長、その他の高ランクの生徒が総手で対処に当たっている。

「あれが今の現状だ。このままだと、サクリファイスが外に出るのも時間の問題だな」

もう一人の俺が状況を冷静に見ている。けど、このまま向こうに戻っても足手まといにしかならないのは目に見えてる。

「どうしたらいいんだ……」

俺は右手で頭を無造作に掴む。

何も出来ない自分に腹が立った。

何が主人公だよ。ピンチになっても何も出来ないような奴なんか、主人公でいる資格なんか無いだろ。そう考えると、自分の浅はかさ、に苛立ち、苛立ちすぎて逆に冷静になってきた。

頭の底が冷えていく感覚がする。言うなれば、ピンと張った一本の糸のように感覚が研ぎ澄まされていく。

どうしたらあの状況を切り抜けられる？ 自分にはまだ出来ることがあるはずだ。そう考えると、自分の底から何かが湧き上がってくるのを感じた。

「一つだけ方法があるぞ」

そうしていると、唐突にもう一人の俺がそう言った。

「造物主の掟を使え。あれなら、手っ取り早く全員を救うことが出来る」

たしかに、俺のアーティファクトを使えば可能性はあるかもしれない。けど

「駄目だ。俺はあれの使い方を知らない」

それに、知っていたらとづくに使っている。使えるものは最大限に利用するのが俺の主義だし。

けどもう一人の俺は、そんな俺の考えを真つ向から否定した。

「お前は知ってるはずだ。なんて言ったって、お前は現行世界に生きている、言わば上位固体だ。それなら、並行世界に存在する自分の下位固体の情報を集約して自分の知識に置き換えることも出来るはずだ」

「下位固体からの……情報の集約……？」

そうか、その手があったか。

人間には誰でも、ありもしない世界の記憶というものが存在するものだ。それが夢という形で現れることがあれば、まったく記憶の底から出てこないと言うこともありえる。これだけの説明だと分かりにくいかもしれないが、現行世界に生きる俺たちは、『並行世界に生きる自分以外の自分』の情報をバックアップのような形で脳内に保存される。つまり、その情報を『受け取り』だけではなく、『

発信』と『受信』の両方をできるようにすればいい。少し手間はかかるが、そうすれば自分が知り得ないことでも知ることが出来る。

「現行世界から枝分かれした先にいる俺たち並行世界の住人は、上位固体の死と時を同じくして消滅する。けど、俺にはまだやらなくちゃいけないことがある。こんなところで死んでくれるなよ、『現行世界の俺』」

「分かってる。俺だって、このまま引き下がる気はないからな。忠告感謝するぜ、『並行世界の俺』」

俺がそう言つと、もう一人の俺はそこから姿を消した。おそらく、自分のいた世界へと帰っていったんだろう。

俺の頭の中には、ありもしない世界の記憶と『造物主の掟』に関する情報だけが残された。これだけの情報があれば、サクリファイスはどうにかすることも出来そうだ。

「情報のインストール完了。……待つてろよ、愛華」

そう呟くと同時に俺の体を光の粒子が包み込み、俺の意識は遥かな高みへと上っていった。

「龍馬……っ」

頭の左側に柔らかいものを感じて目を覚ますと、さっきの世界で見たのと同じように愛華が俺の頭を抱いていた。

「死んじやだ……っ」

頬に当たる温かい雫は愛華の目から零れた涙か。

もう少しこのままでいたいけど、そろそろ時間が無さそうだ。

「……愛華」

「……っ？」

「ちよつと、放して」

俺が意識を取り戻したのに驚いたのか、愛華はパツと俺の頭を解放した。

「龍馬……大丈夫なの……？」

「まだ体中痛いけど、泣き言も言ってられないだろ？」

サクリファイスは外に出ようとして、観客席で障壁を張っていた教師陣と派手な戦闘を繰り広げていた。けど、あの状況だと突破されるのは時間の問題だろう。

「俺はあの化け物を空間の狭間に送り返す。協力してくれるか？」

少なくとも、今の俺じゃサクリファイスとやりあうのは自殺行為だ。最低でも、あれの攻撃を完全に防いでくれるレベルの魔法使いが必要になる。

「……………うん！」

愛華は涙を拭くと、健気に笑った。

「じゃあ始める。来たれ」

ポケットからカードを取り出し、キーを口にすると俺の手の中に一冊の本が現れた。

「それが、龍馬のアーティファクト？」

「ああ。『「トド・オフ・ザ・ライフメイカー造物主の掟』って言うんだ」

表紙をめくって説明文のところを見ると、そこには以前見た時と変わらない文章が書かれているだけだった。しかし

（分かる。なにをどうしたらちゃんと動作するのか、手に取るようにはつきりと）

かつて感じたことのない感覚に若干の戸惑いを覚えるが、それはすぐに変わりようのない自信へと変わった。

この『造物主の掟』は、書いたことがそのまま現実に適用される。ただし、それを適用するには条件があつて、必ず一つの文章として纏めなければならない。

要するに、タイトル、プロローグ、物語の起承転結、エピローグまで順番に書いていかないと適用されないということだ。ただし、この場合、起承転結とかは適当でも良い。たとえば曖昧だろうと、書き込んだものが全てが適用される。

「愛華、五分間耐えてくれ。それで全て終わる」

「分かった。こっちはまかせて」

俺が空中に浮いている万年筆を挿んだ瞬間、サクリファイスの目がこっちを向いた。

「三式魔法陣展開！ 『絶対防御の盾』！」

愛華が俺らの前に水属性最強の防御魔法、『絶対防御の盾』を展開する。

（タイトルは……鎖でつながれた獣）

文章といっても、別にそのとおりにやる必要は無い。短い一文だけで十分に文章は成り立つ。そして、適用された文章には文末に「済」を付けること。

そして、一番重要なのは、最後に「適用する」と発声すること。これをやらないとどれだけ長い文章を書いても適用されない。

序章。獣は自らを戒める鎖から逃れ、自らが生きる世界と別の世界に足を踏み出す。済。

第一章。まず、獣は自らの鎖を解き放つ方法を模索し、外の世界に干渉することでエネルギーを蓄え、機が熟すのを待つ。済。

第二章。自らが存在する世界に干渉できる者が現れ、その者からエネルギーを奪うことで自らを戒める鎖を解き放ち、獣は外の世界に飛び出す。済。

第三章。だが、そこで待っていたのは己の力など遠く及ばない力を持った存在。獣は己の無力さを知り、自らの存在していた世界に戻る。

第四章。獣が飛び出した世界と獣の存在していた世界の狭間には強力な封印が施され、獣がそこから現れることは二度と無かった。

終章。その後の獣を知る者はいない。

（こんなもんか）

序章から第二章まではなんとなく感じで書いた。獣というのはサクリファイスのこと。既にこっちの世界に出て来てるから本題は第三章からだ。

愛華はずっとサクリファイスの攻撃を耐えているみたいだから、

その顔には疲労の色が濃く見える。それもそうだろう。『絶対防御の盾』の魔力消費量は半端じゃない。全てのダメージを魔力に変換する効果があるとは言え、いつまでもその状態がもつわけじゃない。適用する」

そう発声すると同時に、サクリファイスの攻撃の手が止まる。

「え……？」

愛華が出した『絶対防御の盾』を消滅したのと同時に、何も無い空間から鎖が現れ、サクリファイスの肩に深々と突き刺さった。

「次元の狭間に還れ！」

俺がそう叫ぶのと同時に、空間に巨大な穴が開いた。鎖が突き刺さったサクリファイスはなんとか抵抗をしようとするが、空間の穴から数十本の鎖が現れ、サクリファイスの体を雁字搦めにした。

サクリファイスはしばらく抵抗を続けていたが、無駄だということとを悟ったのか急に大人しくなり、それ以降は何の抵抗もせずに空間の穴の中に引きずり込まれていった。

「第三章、済つと」

第三章の一文の最後に「済」と書くと、空間の穴が閉じた。

「第四章、エピソードも済……つと」

傍目には分からないと思うが、俺の目には空間の間に次元断層が刻まれ、歪曲空間が現行世界と並行世界から完全に隔離されたのが分かった。

「これで……終わり……」

そのまま、体の痛みで意識が再び落ちた。

「まったく、死ぬかと思ったぞ」

「俺もだ」

第一アリーナから少し離れたところにある葉盟学院大学部の大学病院、その一室に俺と仁は入院していた。

俺たちがこの病院に収容されてから二日が経っている。つまり、ランキング戦から二日経った日曜日の午後だ。

仁はサクリファイイスに腹を貫かれた直後に傷口を氷魔法で凍らせ、出血を防いでいたために特に異常もなくこうして入院している。俺はというと、挟られた左腕はサクリファイイスの光線で消し飛んだらしいけど、物凄く優秀なクレリックの三年生が左腕を再生してくれたらしく、今までと同じように腕はある。ただ、肩と鎖骨、肋骨は粉碎骨折していたため、治すにはもう少し時間がかかるということだった。

「しっかし、まさかサクリファイイスが出てくるなんてな」

さつき大和に聞いた話だけど、ランキング戦はやるたびにモンスターが乱入してくるらしい。その強さはまちまちだけど、今回みたいにサクリファイイスみたいなモンスターが乱入したことは今までに一回もなかったらしい。

「ランキング戦も流れちゃったし、残った一学期の行事は期末テストだけか……」

「お前文系団子なんだろ？ 大丈夫か？」

「いつも通りやるだけだ。まあ、問題文全部二十六進数にしてくれたら百点取れるんだけどな」

「それはそれで凄いなと思うぞ」

二十六進数って、俺でも解くのが困難なのに。

「龍馬、仁、お見舞いに来たよ」

仁とそんな会話をしていると、愛華が花と果物を持って病室に入ってきた。

「ありがとな、愛華」

「うん！」

聞いた話だと俺が倒れた後、愛華はずっと泣きじゃくっていたらしい。けど、今はこうやって笑顔を見せてくれる。それだけで、自分が出たことは無駄じゃないって思える。

(まあ、怪我せずにいるっていうのが最善なんだろうけど)

でも、結果オーライってことで。

「そうだ、龍馬のランキング変わるっばいよ」

「そうなのか？」

エルザとの勝負はついてないし、誰ともランキング戦やってないから順位は変わらないと思うんだけど。

「割り込みだつてよ」

「お、大和」

いつの間にか、病室の扉のところに大和が立っていた。

「割り込みつて？」

「そのまま。お前の功績を讃えて前代未聞の割り込みランクインだとよ」

「へえ？ 何位？」

「五位」

ランキング戦もやってないのにいきなり五位かよ。よく他の生徒が許したな。

「お前がいなかったら学院が消えてたかもしれないって事二年の全員に話したら、全員が承認した。つまり、お前の実力が認められたんだよ」

「マジか？」

なんかいまいち釈然としないけど……まあ、いつか。

「そういえばエルザはどうした？」

あの後、俺はエルザの姿を見ていない。どこかに避難したならそれでいいけど、なんか引つかかる点があるんだ。大したことじゃないけど。

「さっき病室の前で中に入ろうかどうか迷ってたみただけど、俺が声かけたら急に走ってどこか行っちゃったな」

「そっか」

まあ、そのうち会えるだろう。

「退院まであとどれくらい？」

「仁は明日。俺はもう少しかかりそう」

「そつか。じゃあ、次は明後日来るね」

「おう」

愛華はそう言うと、病室から出て行った。

「大和はどうするんだ？」

俺がそう尋ねると、大和は呉服の中からマグネットの携帯将棋を取り出した。

「将棋しねえ？」

「お、いいな。けど、俺強いぜ」

「俺は七段だ」

そのまま大和との将棋が始まった。

結果は、今日一日だけで十四戦二勝十二敗だった。（大和、超強い）

あれから三日。俺もようやく退院して普通の高校生活に戻っていた。

サクリファイスは俺が次元の狭間に封印したから二度と出てくることは無いと思うけど、問題はその後の調査で分かったことだ。

教師陣が調査をした結果、サクリファイスが出て来たのは自分の意思ではなく、何者かに誘導されたような痕跡があったという報告が出ていて、この学院に何かの工作員らしき人がもぐりこんでいるかもしれないと言う可能性が浮上した。確かに、サクリファイスが自分で他の空間に干渉できるなら今までもそういうことがあったはずだし、それが今まで無かったんだから誰かが意図的にサクリファイスを誘導したことになる。

今も原因の解明が進められているが、あまり状況は芳しくないらしい。他の空間に干渉できるほどの魔法を使える人物がそもそもこの学院にいないため、最初は俺が疑われていたが、自分の腕を犠牲

にしてまでサクリファイスを封印するだろうか、という意見が多く出たため、特にお咎めなしで解放された（昨日の話）。

「ま、ようやく平和になったな」

あれ以降エルザも姿を見せないし、入院してる間は殆ど毎日のように大和とお茶を啜りながら囲碁や将棋に明け暮れてたし（大和の強さが異常）、いろいろと続いていた問題もようやく収束した。唯一気がかりなのは期末テストだけど、葉盟学院の偏差値は神流学園よりも低いから特に問題は無いだろう。

ちなみに、神流学園の偏差値は七四（東大以上）、葉盟学院の偏差値は五九だ。

入院してる間に魔法のことも勉強したし、特別措置とかで学年のランクもいきなり五位に上がったし、この学院での俺の立場も少しは良くなるものだと思いたい。

梅雨前線がようやくやってきた日本列島は、相変わらず気分が鬱になるほどの連日の雨模様で空気がじめじめしている。紫陽花あじさいは鮮やかに咲いて、カタツムリとかもよく見かけるようになった。

「なんか、いろいろありすぎた反動で退屈になったな……」

今は一日の授業も終わって、誰もいなくなった教室の中でぼんやりと物思いに耽っているところだ。大和は部活に行っだし、仁は経過観察で大病院のほうに行っている。愛華も、大会が二週間後に迫るとかでここ最近はあまり会っていない。

「……帰るか」

机の横に引っ掛けてあったカバンを持って教室を出る。すると、教室のドアのところに一人の女子が立っていた。

「エルザ？」

「少し、お時間頂けますかしら？」

「ああ、別に構わないけど」

俺がそう言うと、エルザは八階の隅のほうにある準備室のほうに歩いていった。俺もその後を追うようにして廊下を歩く。

「ここなら誰にも邪魔されずに済みそうですね」

エルザと一緒に入った準備室は、少し埃を被った備品が放置されたままのあまり健康的にはよろしくないところだった。それはつまり、ここには誰も来ないことを表している。

「先日は危ないところを助けていただき、ありがとうございます」
「お、おう」

「なんだ？ このお嬢様がこんな素直に礼を言うなんて、天変地異の前触れか？ とうとう東海沖地震がやってくるんだらうか。」

「それで、一つ聞きたいことがあるんですの」
「聞きたいこと？」

「はい。あの時、わたくしを突き飛ばした時、貴方はこう仰いましたわね。『弱い者を助けるのが主人公』と」

「ああ、確かに言ったな」

あの時はなんとなくそう言っただけだったけど、よくよく考えたら結構恥ずかしい事言ってたな。なんか、思い返すと顔から火が出そうだ。

「その……わたくしも守っていただけなんですの？」
「は？」

「どういうことだ？ 何が聞きたいのかさっぱりだ。」

まあ、ともかく、

「目の前でピンチになってる奴がいたら俺はどんな奴でも助けるぞ。それがたとえ、守られる資格が無いって思ってる奴だったとしても」
大体、誰かを守るだけの力を持っていながら誰も守らない奴なんて、臆病者かクズかのどっちかだ。俺はそんな風になりたくはないし、目の前で困ってる奴がいたら敵だろうと自分を嫌ってる奴だろうと関係無しに助ける。まあ、ベタだけどそれが主人公ってものだ。俺は思ってる。

「そう………ですの………」
「ん？」

「なんでもありませんわ。それでは、わたくしはこれで失礼します」
そう言うと、エルザは堂々とした歩き方で準備室から出て行った。

「……何だっただんだ一体」
当然、俺の質問に答えてくれる奴なんていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287s/>

名無き世界と未知の世界(仮)

2011年6月7日13時25分発行